閑田次筆

三四

和書門
二七二七一 號 類
九一 函
四 架
二 冊

内閣文庫
和書 類
二七二七一 號
二 冊
二二三 函
五 架

内閣文庫
番號 和 27271
冊數 2 （ 2 ）
函號 213 38

閑田次筆巻之二

○性霊集 弘法大師 詩偈集 常にシヤウレウ集とよむを甚
宗徒は宗讃するにセイレイと漢音によむ是佛書
にかゝはるゆゑなしとはいへどもこれも故實なればこゝろえ
おくべきよしこし宗家の学力ある法師の話なり
○同話に性霊集を編じたまへる真済僧正は大師
の上足なり然るに此真済僧正のことを元亨釋書
に深厳の后に恋慕して魔中の魁となれりといふ
ことを出せりこれ何に出たることにや本據覚束なき
と人のいふぞかしたまたま陸奥仙臺の沙門梅国といへる
博覧の人乃性霊集を注せる便蒙抄といふものに右

明治十二年購求
大壇書庫

の説通に俳志といへるつたなき仮名書のものにみえたる
お他に據なし釈書もこれが基なるべしやいかにと
ぞ元亨釈書には無稽の事あまたさ
るべし菅丞の天帝に祈請して雷に成給ひし
あるは役小角の葛城の橋と一言主の神にあつ
らへしことなどもありしれど是本書をもとめ次伝
説の誤のまゝに記せるなり凡其ら旨のなのみ
は信じ難き穿鑿に及ばれざりしの彼是他宗の説共に
はおいても違へることも多しや或偏売の話せられたさ
又此釈書の文不穏(ヲダヤカ)助語等あるを明王玄才及
盧安堂とりて儒者難じたるを皇明張美採と以て
書ふなりとなる人にいへり

○古今集の端にも聞しく大師の弟子真雅僧
正も業平朝臣の児童なりし時其美見にめで
たまひしよりそれの山乃思ひしの歌をよみ給へる
といふ説あり可尊と記せりこれは古今集にて
よみ人しらずの歌の何によりて作者をさだめて
かやうの説をなしけん可尊といへるはすべて先哲
なるにこそあれど此説若は忠にはあらねど か
やうの俗説は出さでもあるなん
○故人海棠貴業義の書にて折骨すべしと
ありしかれは荼毘(タヒ)(火サウノ事)てる後骨を粉砕(クダキ)して河
へ流せよといへりと聞つたへる其のち
海棠も久しく病て身まかりゆくこれも義は

倣ひて、ふるのむかしより折骨なりし櫻のもとといふ
言を好せり。火葬して河へ流し、其なき跡の
あるしるし、生前好める櫻一木を植よといふこと
など聞えぬ。此折骨といふことは、あまねく尋問へども
知る人なかりしかば、續畸人傳に海棠が小傳を端
に書し時も、あらはさぬよしを記して止めつ。後にそのち
なみに、黄檗大眉和尚の傳をよみけるに、手
して撒骨のことありしかば、正字通にて正せるに、撒
字の下のはしに云、同撒。韓愈冊盧仝月蝕辭。星
如撒沙出。攢集爭強雄。といふを引。又撒字ノ注。
音薩。側手擊也。公羊傳。宋萬臂撒仇牧。文辭
愈爲孟郊墓誌。惟其大翫干辭而与世抹撒

註。掃滅也。古へ通用。未教云云。此諸説を合せ考ふるに
碎の意なるべし。又掃滅といふても碎よりの轉ならん。彼撒骨
も火葬して骨の粉になれるといふならん。然して碎きて
河へ流すなどいふ義ならば、あるまじ。これは撒骨して後
に川へ流せよといひ残されしを、誤り傳へてしかるべし。
文字も折と誤りしよりまぎれたるにて、唐山の
禅院などにては常にいふことなるべし。しかれども世中のことも
にうとければ、たまたま見聞をとめ、ちなみに付て其
を業ることしと自喜を
○或人云、葉はならびて數まるものに聞ゆ。蝶はならび
なるを、鰈はならびて鰈はまたはならび、蝶も戸張りて
左右をとりちらかしたるもの也

○字義にひしとあひたる訓もありて又あはせざる
もあり。したとへば餞字は説文に去を送るとしるし
以酒食送るとも注せり。詩経邶風の注には
道祖神をまつりて後其側にて飲しとも。これも
送るにやりて此字をうかのあれなれども説文
の去を送るはあくまで食に従ふ字義と詞とは
大に異なり。馬の鼻むけとは旅に立人の馬の
鼻のむきを行さきへむけて送ることといひならはし或説には
馬の鼻をたづねてむけとへいひむけて如此はやく帰
きたれといふ意といふは道理なし。ろく当らず
いづれにもあれ旅ゆくを送るなれば此合せてこれとる
も酒食をもてなすに用る事なりて餞字をあてし

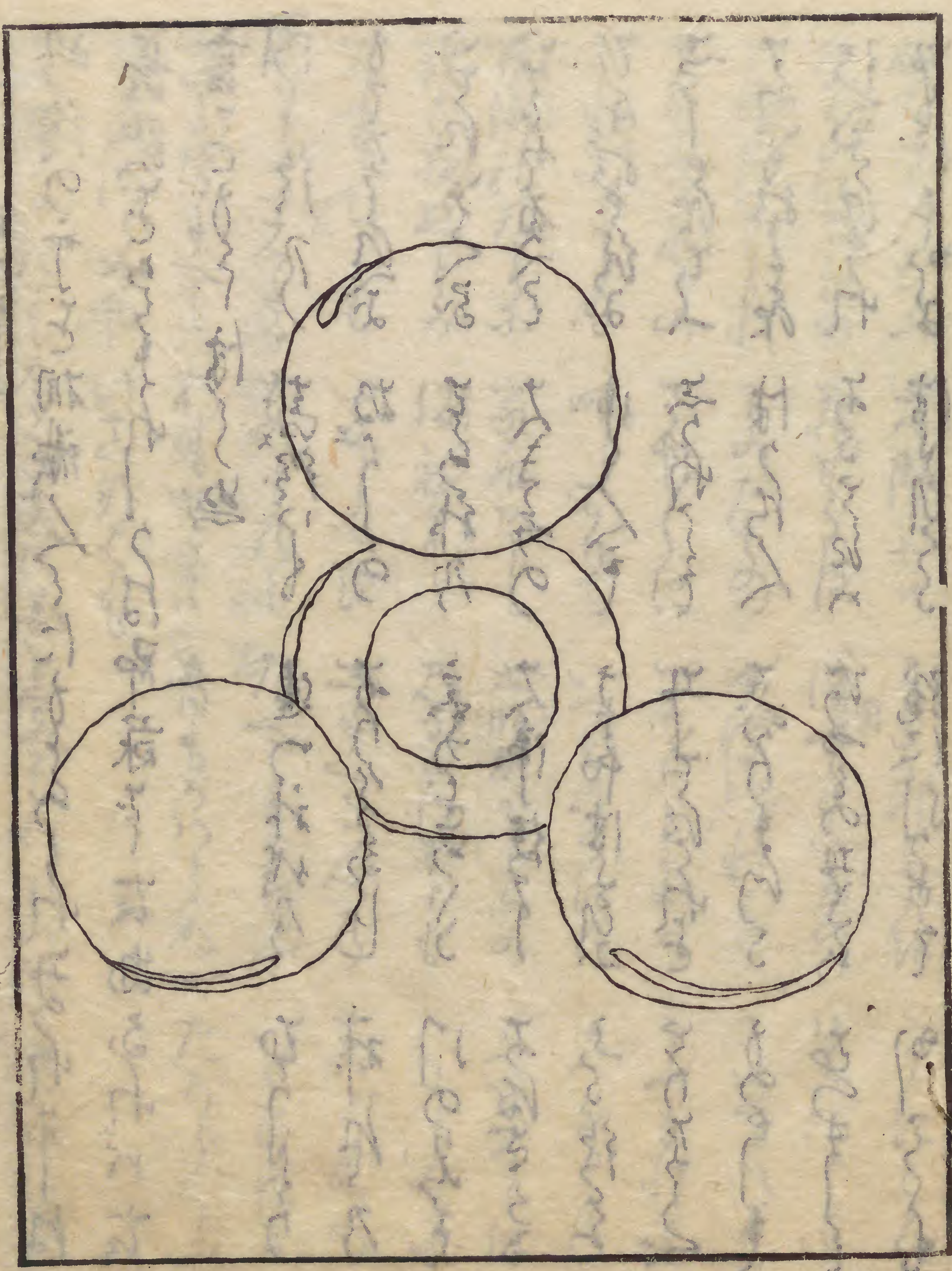
輓歌挽も同じといふは柩を挽とうたふ歌にて漢の田横
が故事よりおこりたる哀傷の詩歌の名にて
万葉集にも是を輓歌と題せし類なれば混ずべからず辨
ふべし

○すべて音義に贉し元来独学の弊なり
かゝるひがこと同じき事にてもしらするなり
も他人は遼東のいのこなるべし。史記貨殖伝に
呉楚七国兵起時。長安中列侯封君。行従軍旅。
齎貸子銭。子銭家以為侯邑国在関東。関東成
敗未決。莫肯与。唯無塩氏。出捐千金貸。其息什
之。索隠に初齎貸を注して云。齎音子稽反之。
貸候也。音吐得反とくし。後千金下の貸を注して。

貸吐代反へ。正字通を考るに貸度耐切音代。假
貸無息為貸有息為貸と申ありて吐得音義なく
候の字注も有し字典をみれバ考るに
及び次吐得反音義なしと見て記置索隠のごとく
ハ今も俗らくてうるハトクめきハタイの音とすべき也
○綴耕録ニ陶宗儀が所写ハ紙を傍に置て観て学び摹写
ハ落帋をうりし本書に覆ひて筆を用ゆといへる也
譯文筌蹄に取違へて書れたりや或人見出せり
乃ち徂徠氏なりともしりて大家の空ならべく惜べし
且豪傑の人を謳るも又まゝある例なれバ此老琵琶
を転倒して琵琶とはうたひて顧にかゝりぬれたる詩
ありと又或人いへりき

○世に行基焼といふ尻のすわらぬ壺あり席に居る
用にあらねバ茶毗の骨を納るゝにあらねどもとし行ふ
うけて花を挿料などに用ゐるを謬る人ありけるゆへに
この頃ある人語るを陸奥塩竈明神の神貨に如此
の壺ありけるゆへ神酒を奉る器といへり是に酒を
いれて奉る時新におのづから尊くて居ることを
嫌て此壺をと居るし尻の居らぬやうにつくられ
たる用に充たる器とこそいへり斎瓮の
おもふに万葉集のもおほく斎戸をとよみたり
えといふも神を祭りてこれをほりて居るなり
うれへり志ぐるべし此行基焼も此瓮の若骨も永
壺へ入て土中に埋むなれバさるべき器を用ゐ

国立公文書館 National Archives of Japan



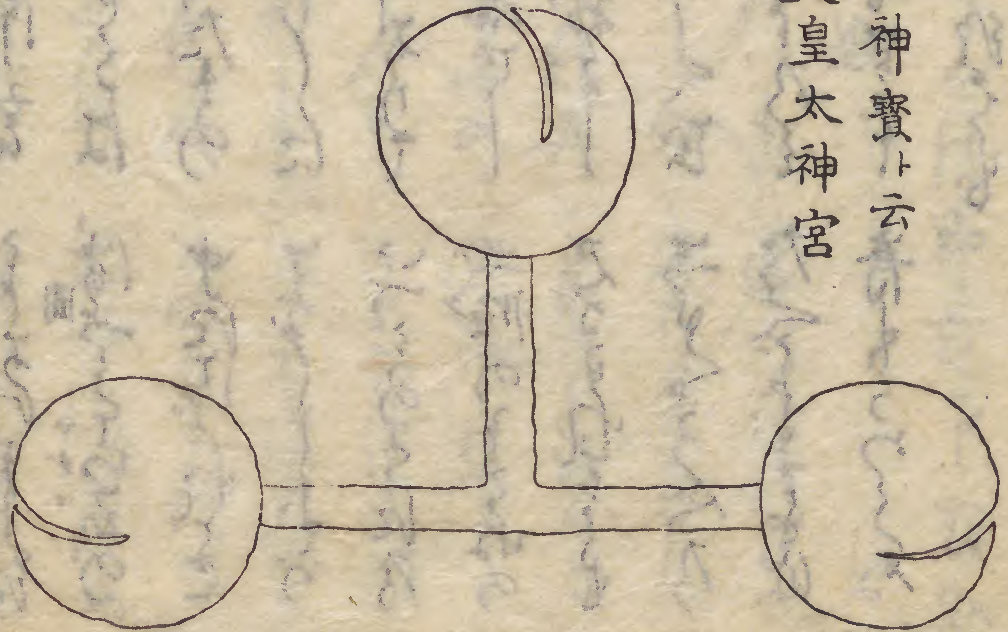
鍾は鈴しきものなれど大きさ形も酒器に近
○此弁亭主金子氏は古器物古書画の類を好
数物をあまた集(ツド)へて弁せらる其中に和泉国
大鳥郡百済(クタラ)村より堀出せしといふ古鈴あり
此ところは土師(ハジ)氏祖(ノオヤ)野見宿祢の宅地にて東に
反正天皇の陵(ミサヾキ)西に履仲天皇の陵あり仁徳天
皇の大仙陵も近し宿祢の社もその近くにあり
さればは其代の物なるべしといへり刀剣類もありし
かども是は錆腐(サビクサリ)て欠損(カケソン)じ唯此鈴のみ今に存せ
しとぞ即図こゝに挙

此所の事を相識ル人にもとめられよのれうは
長歌をとらしめられうは即詠せよ古ねるれバ古
言をとりて侍りぬ
國しらす乃　吉野にも　遠つ神代乃　あとしあり
まてなうべく　故よしの　ありけるし　神代乃
いせにはた　八雲の宮を　めぐる　川の流も
いまだ不変　大きみの　大御使　あらざる
ひろき御代は　ゆく人も　うちやはるかに　道をたどる
きよしと思ちて　思われて　此ではれを　とりなべく
むかしの御世を　思ひ人　あがりまゐる　あふぎても
仰ぎまつれ　ありきれ　ひろきこの地さへ　あらましを
神もはるかに　侍るかな　猶に仰ぎて　申す

出でゆくちふ　大御言　ことあげましし　ころにこの
今はな御名の　叢雲は　結づる玉の　星ならし
天地たえて　このたまの　中にちぢれを　こもれで
うちふる年の　さやけくに　まづしおし　すがれて
よろづへむりも　時ありて　いづるの流乃　大ゐ乃
百綿結ぶ　家居せし　土際のそこねの　ふる年に
敷きまれ出その　仮初　八重垣えても　いひしくふ
おほぢ出して　いかしくな　きよくる人乃　ききごとの
きよしふえる　あまの乃き　たくへまきを次　いくひはな
あなはまへて　物もせず　一脊もうつるぬ　たうとし
おかめげしめや　けきはとも
又國々記をも今は民にさとすべし其始脊たに写し

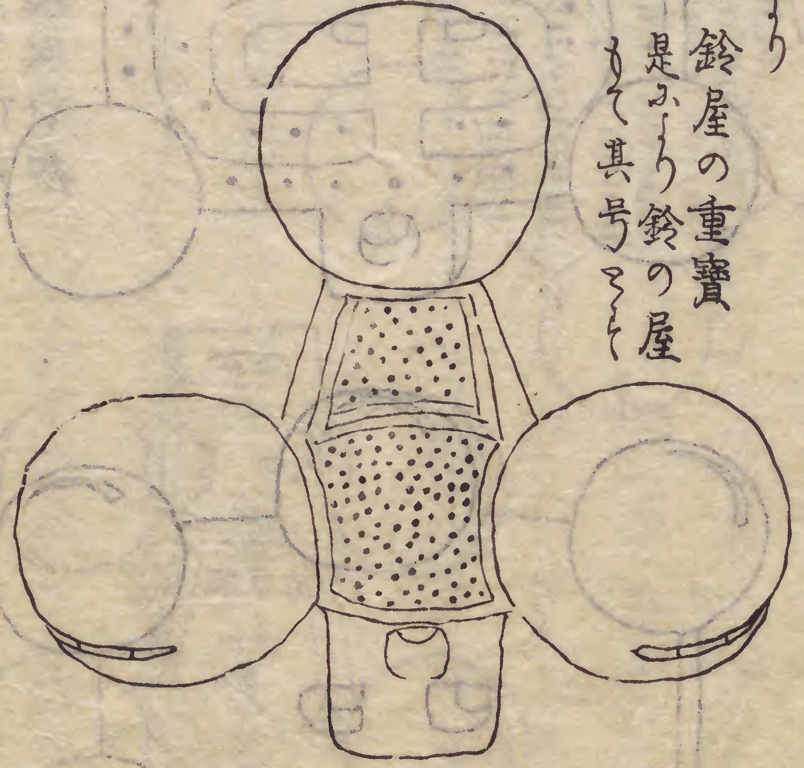
比禮鈴

神武天皇十種神寶ト云
浪花座摩豊受皇太神宮
神寶



五十鈴宮の境内山中より
堀出安永の末蓬莱大夫荒
木田尚賢のもとより
本居翁へ送る

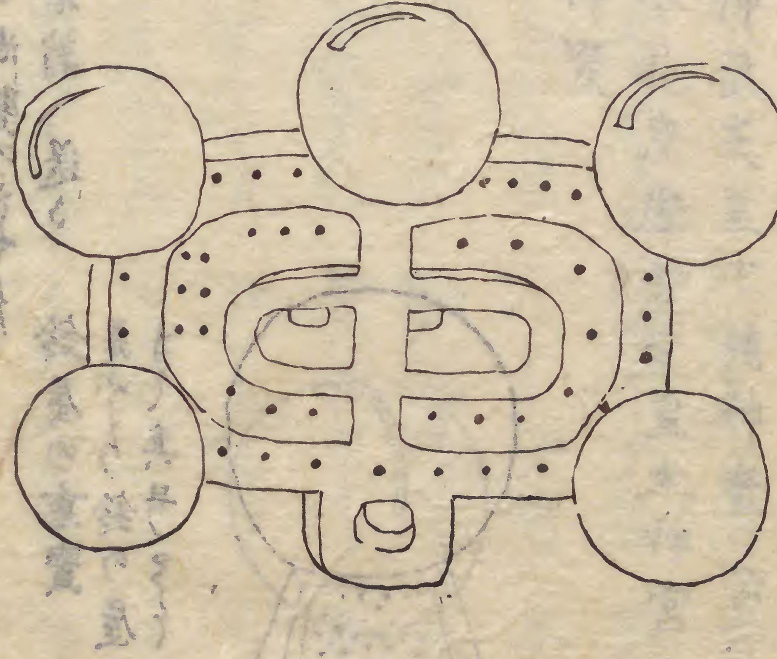
鈴屋の重寶
是により鈴の屋
もて其号とそ

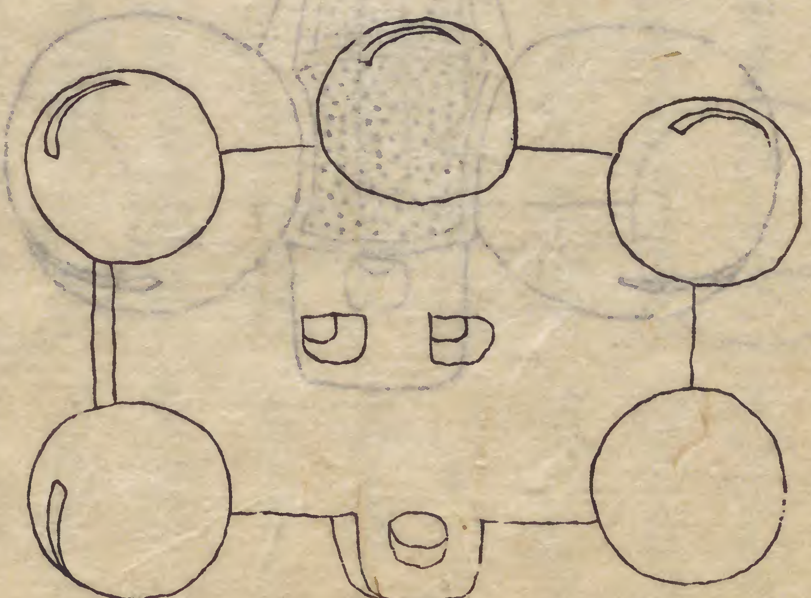


国立公文書館
National Archives of Japan

古鈴在所不知圖傳之

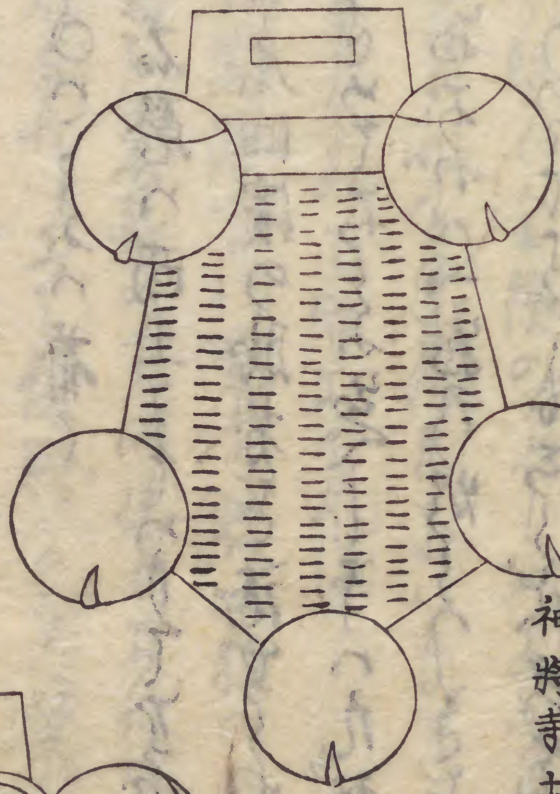
面之圖

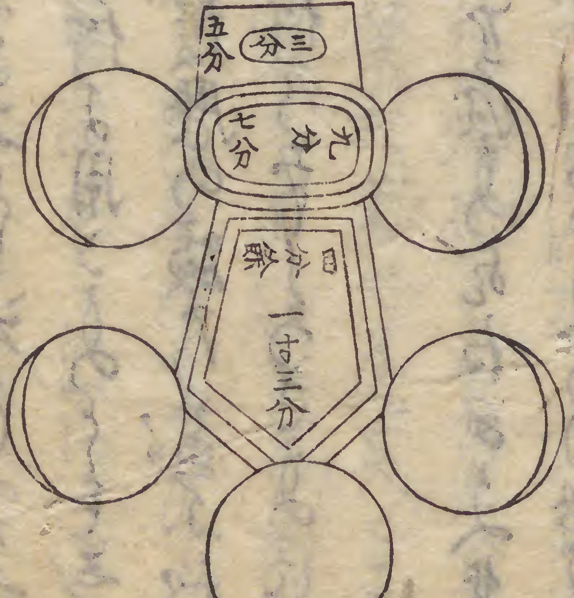




背之圖

下總國行徳善照寺所藏





下總国周集郡貞元村（サダモト）
神將寺土中所出或作淮和名抄作雉
二字スエトヨマシ

○先年鴨川大水の時三條のわたりにて掘出せり
それとたる物中盥(タラヒ)の大きさほどにて銅のふたあり
銕乃清(サビ)腐(クサリ)しくしるしもあり何に用るものとも知られ
ざれど佛具にやあらん護摩の爐乃蓋(フタ)に似たり
き圖をうつし置きぬれども何乃用ありしものにか
らるべきハ猶く
○石磬ハ西土にてハすでにありとも人文集にも
華原泗濱の勝劣を論ぜられたる文あり此方にも
たくさんにあるべし吾ハ九谿の石にて作れる
一節あれバ一節乃形を写しおきぬれバ
やうのこともあらバ先年讃岐の縁から
出たるものにて其園菊池氏よりおくられしその図

机刀た羲氏の象(カタチ)にて膚(ハダヘ)ハ蜂の巣に似たり
李堅く金質のごとし此石ハ折て捨るに
あらず此色清あるハ赤き土の凝(コ)りて数百年を
經しものにやあらん
○陶淵明ハ菊を愛ふ祖のやうにいへハ非也
菊を東籬のもとに採(トル)とあれバ摘採(ツミトリ)て茶用食用に
充(アテ)しものにて離騒(リソウ)にも夕に秋菊之落英(ラクエイ)を餐(クラフ)と
覺しくは極景が重陽に高みに登りて菊花酒
に漬(ヒタ)て飲ひ給ふしも元稹が花中偏愛
菊をあるにあらず此華開後更無花なし
とも言ひ出しもかくいひしにて菊は
花の隠逸なるものとハ茂叔のことをも唯叢中(クサムラノウチ)に交(マジハ)

つくしたるなりあらされどもみなおなじく今の世のごとく
植をきちるよりはなはだしくに心を尽して大菊
中菊それ〳〵の趣をなせり或は一茎数十の
金をも代とせざれば盤華の重宝とせるまでに花も
隠逸なりといへども隠者なる人其節を人の志
に態ともこれあし奇花をもとめ絵にうつしてはなはだ
菊ともなくある花形なるも此世にうつはやしたるものなし
ならず此種を奈良の御代まではいまだ渡らざりしにや万
葉集中にはいまだ見えず字音のまゝにてよみならふ
なり新撰字鏡にはかはらよもぎといひ又菊州
なとといふも異名なり日本後紀に桓武帝の御製
此ごろのしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたらその香を

と遊ばせしよし見えたれば此御代のころはじめて来りし
ならんされどそれ以前より色香をめづることありしなるべし
○風鈴は開元遺事に見えてそれより前は知る人多し其の家に
杜拾遺句に風箏吹玉柱註に風箏檐角鈴也風鈴
聲如箏云と或人説せり又如浄風鈴乃詩を説て
通身是口懸虚空不問東西南北風一等為他談般
若滴丁東了滴丁東此滴丁東の字チンツンと云磬
音也了はリャンとよむすべて其聲をうつしたりといへども私
にあらず寄に道理なれば法句には般若を唱ふ
べし此作者は全篇禅を談ずるなし
○大和下條邑某寺に某皇后の護持佛として弥陀
尊の像を長良の橋乃蕉村にて作り其背面に公

仍て直筆の歌なりとも
「なかつ江の蘆ようがすかな橋はしら文字えてひやも
ころ思ひしこれ歌人の語としありつる上の句はたゞふくにの
よしたかりし所はしなかりしなおもふしたる下句らして
別本に有れり實にさもあれば仕りさ給べし但し公
任々や名は明證をもとむべし
○橘經亮說に遠江の天龍河をむかしはあれのと云
しと西行發心記に人の龍乃梵語那可をいふとあるは
なりさ海道記に無々鴨長明と作りるは甚非なり年記によるにあり見ぬる
の中河とひふは誤れりとぞかん
○古事記神武天皇條に大継髮出入郎失しり
ゝ文面諸先達皆解得ずに梅尾山の古き文書
の熊野縁記乃なかに古事記乃文二行を引し中に
大継髮出入ある所見えて明白し此古き文書は二
百年來以前のものにて文字も誤字謬るなべしと
弁苞禪師が語れり
○名田は古田にして度氏蒙林に出しも名田乃事みえず
○包含碑は他々にて死したる者をとりうめしに志
るしとせし文同書に出づ
○季皇爲乃語よ札にとみ歌爲を清濁といへり
清字下し得ざる面白しと歌人いへり
○行基菩薩常に清し留青廣集といふものにしるせり
これも歌人いへりげなりのやうにありて菱とたゞ次
べくとれ菱もまた君からまさば恥づかしきものに

○螟蛉有子果蠃負之といへるハ聖語なれど非なるを
さとれども實に然らず他の虫の子をとりて冬籠の食料に
蓄へしと西土の人いへるあり是甚だ非也といへる人これを正しくさとす
虫の子の年ハ果蠃に變じたるといふにより變化を信ぜざりけり
かゝる説となへられて菜虫の嫌ふなるんで雨湿に閉られて
化するといへどもひとふおき耳になりさとりとこあり是を
焊草といへり本草にも出て古今青桐の葉に化するも亦奇也
いへし又求隠葉てふ物へ何か化せんとす虫を蔵れなからあり
さればむかしも僕の煆鍛に行しより邪気の旅よりんてそそ
仙術を懐ふ人僧の行ひを説すかりしもまたよろしきもるふり
○奇袋のさもんなのにあてられしハちとふにて候べくこれも
古錦嚢詩瓢の故事より出るべしと或学僧

の考とし古錦嚢ハ李賀工詩。毎日出騎款段
馬。従小奚奴背古錦嚢所得詩入嚢中。母見
之曰。是兒嘔出心肝迺已。詩瓢ハ唐求得詩投瓢中。
臥病投瓢于江曰。斯文苟不沈没得者方知
吾意耳。至新渠有識者。曰唐山人之瓢也。
○染本様の書をよくする人江戸に洮寿といへるは
大仏殿とかいふものを擽みて大仏殿焼亡の年に
寄附せられし一字ぐらいの大さの人楠色のよさなるの
扨さ然りとおもふは非也鑑定の傳ありとて其書の
門人長坂長泰へいひこしたるは 寛（此点下へ引通サス）永（此ホヘ寸よる点あり）
是は此方ひきもはなれたる様長泰は君に従ひしものなれば
人なれば彼自筆のまゝを以て写せしも

○あまてへめくさまる算用に永代とかへ積り有るを
何事にも志ら次第永続と覚えてさりあつてなん然
るに白石の手簡に永楽積りなることは云あり永楽
積りとてハ何積が今の通用積何ほどにあたるといふ事を記し
○手簡に云 經国集の事 原本二十巻の内当時は
四巻斗あるよしに候 流布本ハ恩賜の書あまた也
而荒書肆より門弟へ志をさしはさみ候に只今は左
補をかりて朝夕の康飯にやまひみせるを写したるを
人々も右のごとくにして為写は老拙むかし
今の間を經して論存有之故にハ恩賜の文字にて
猶これによりて 以上手簡 私云手もまた若き日より和漢の
印本写本のもれたるをいづれも人々かしてうつしあつめてとりに記

ものゝありとしくあれバわりなく人もまた人に申し
あはしこゝろよりもまたこれらつたへたるもありて又高價に
かふものは賣券ばかり賞翫せしにて和歌の流もあり
これさへかゝる人をとこれしも亦これりまたありいづれ
かも白石先生のはかられは甚さてとあるたれども
友だちにも浮世次人弱くして扱ふさにきびしく
此手簡をよろしく此手簡ハ人々のまちまちとぞ聞えし
○同手簡云 上略 傳撰補足(ツタヘウツシオギナヒタス)兆(ス)甚真(ニ)とは欧陽公集
古録の序の語なり 古くハ三代の碑銘など集めし
作手 欧陽永叔のことなり 其後廣川書跋などの
ごの類あまたいくつもしらぐる作欧陽公乃序中の如く
筆をとり写しては其のまゝ写しては人のあやまりはさん

處にひかれて筆を改し補ひてそのまゝ附ひ字に傳
了ぬりしもの此みな本の文をうつしてまのにて越して旧
きまの也又漫滅刻缺ぐちたる所なる石本も有べし況
してへ本の文へこれなきものとてひにて見たる人の字を文乃
清治めて親へあるよしにいへば中より字写易に親りかたかし
いあるひぬかくゆめて並而を碑字見たる人乃あやまりかたし
況ましてあるべからしのことハ老独路碑 周是碑の路碑
故より史もとあり 與越人以為兔楚人以為兌といふかく多かり
又くハ此事文に開保のある事なり故に尹入作
大學親民の字程氏ハ新字の誤とみなされたるを
既に湯盤の銘をはじめ新に作るは説の明照さ
る故かくおもうを王陽明ハ親民を字のまゝにみらるべし

よくひかしみて程ハ曲説をまうけてあるはそれ
よりして朱陽の学は別にひとつ衆説起りたるなり
むかしくて其後に書乃金縢ニ新逆とあるを親
逆にひとつ事乃傳説見へ新親音にかよひて證
とするは例なきひとつ事ハまてなり程朱の説に文
の徴も出まりひ文其後にかかる説ハ一事出来りけるし
故程朱の説に拠りひやうに有りひ此説まへ古
書文に新字を新に作りひ親字遠からずハ
由なる科斗文を漢楷にうつしかへて新民を親民とかへ
新逆に本ゆ新民とは親民をさすと云新逆をとハ
十人のみかひつかみにて補足して其の所に本の文を
ハ元来ひとつで此學文をかたえて事に決して古

人活眼ありて活書を讀とやいへることのごとくかく
死眼にて死書を讀たらんにはさらにえきなきは
あるべきにあらず此國造解も古本にしたがふべし
等しく違ありてくはしくは下巻にしるすべき條なり爰に
まうつさずしておのれがあやまり識さるゝ也
○本方の古書を註するに元祿年間までは元本
を守りてさらくはにふてはゆゑなきを改れば世も
古書註釋もかつて改めざりき押よりて註せ
られしは謹厚なりといふべけれど又死字をもいふべし
元祿間よ延佳神主古事記舊事紀をも新に改刻し
鼇頭をも加へられしには他書をも校合して考を付
改られしかばこれよりのち萬葉集をも註せられ

しをはじめ諸書の解校正のもれなど古書どものことなる
訳自己の考をまじて文字を改られしも多し是より
專ら開まで加筆をはじめ專門人これもしと眼を
光らしとされは萬乃古に誤る是は蕪滅さらりなど
云乃まゝに字をも改たる誤をも改むこれは所謂活眼ふ
て活書をよみたるとも云ふべけれど又萬葉集も吾撰の
まゝやうになり古傳の本は亡びたらんやと見し誤を
あやまりつゝ傳へつゞ道となすも更にくさも舊轍(テツ)(ワダチ)を守
るもとまりて表裏ありて遍不及いろいろもさながら次
君がよしさるをはれは書もとくそし難事をも改め測り
のこるは徹(ナラ)の常に開て解するとも歎し彼改竄(カイザン)(アラタムル)
をあたるべしは程朱の中庸大学孝経の古本

よしなき経傳をわづらはせば詩経の小序など論ずるにし
なからんてこそ機讖披露なりといふべきなれ一
家をたつる人はさもあるべしされど其思ひ叢なる人々も
あらん又毒をとりくる人も多からんされば一足一非は
何ごとも道にあることなるべし

○加茂翁鳴の海といふことはさだかならず但へ湖也
に仁保といふ一村あればいふならんといへれし
いふまでもなし野洲郡の蒲生郡に隣りたる所に
仁保といふ里ありて舊名十王堂といひて其所を
聖徳太子のやどり給ひし傳にてさりといふ此
一小村湖水乃名をおひつたふべきにあらず只仁保の
うみとはおほかたに古事記仲哀帝の御乃まくま忍(カレ)

熊(クマノ)王(ミ)共(トモニ)伊佐比宿禰(イサヒノスクネ)共被(レ)追迫(オイセメ)乗(リ)船(ニ)浮(ウキテ)海(ニ)歌(テ)曰。
伊奢(イサ)阿藝(アギ)。振(フル)熊が痛手負はずばにほどりのあふみの
海に潜(カヅキ)せなわ。即入(テ)海(ニ)共(ニ)死(ス)也とあり 伊奢は誘ふ阿藝は吾
君にして振熊ハ敵の将軍にて負ハずしては 吾方へ負せらるゝなり和は語助なり 此歌はにほどりの
あふみの海とはいへれどあふみはなほ淡海なるべし 鳰(ニホ)鳥の海と
はいへる海ぞし右の哥乃意はにほどりのかづくといふ
ことにて此はあふみ乃海と入るといひかけたるのみにて其の
海にむかひより此鳥多かればとてこれを自の海に入んと
するは渡らく鏡行し海べし今も鸊鷉(ニホトリ/ミヅカラ)此海に多し
條々いづくといふはにほてなかれば忽ちづりと求る人
ゆゑつかいついたまへることをいふかのごとし
○手をかけし常にはとを湯りくとを隠して帰するを事

おもふにこれハ氷尾串（ミヨヅシ）とつゞけたれハ、これハ助字成
べしといへバ、これをはやくも聞たれバ青使なりと前編
に長庚星の暮ゝ夕都豆（ヅ）めく、しかも考かた同じ
○白馬をあをうまといへバ、誰もあやしうおもふて
あり、しかれバ白ハ青くみゆるといふ也、それゆゑに此外六
めく人の菅原詩伝後編を見るに、白碧桃ハ即桃
なり、されバ碧梅といふも常の白き梅なるべし。花盛
大が詩に。不知行到（テリ）碧梅辺。但見（ル）天風吹（ニ）積（ヲ）雪（ヲ）。以
て証とすべし。此紅梅に対していふ也、されバ碧も青きも
相通ずべし、しかれども彼国の人ハ常乃白き梅
を白梅といへバ、醜梅（ムメホシ）のことを白梅ともいふにや
詫ける閑田梅見しハ鳥梅に対していへバなるべし、鳥

梅は焼梅なれバ黒し。醜梅ハ塩漬なれバ塩をも常
に白しといへる彼地の製法によりて塩気表に発るゆゑ
斗に為くせるにやあらん。されども此方の製ハ白
○頸聯の神中おもひよらぬ隠者ありて曰、六帖ならし
てもが聞いるゝおもひつゞけたる事も、あらなんとかぐれせん
それハ萬葉集に「蛛が聞いるゝことのつひさそひのあるものから
をよらんせんとおもふにやつけたる奇しきこと、私按ずるにやハ
らげるものハあらじ、深く探るべし。萬葉集にあるさとをうれ
たゞくおもひはおもしろからむし六帖ともいへる奇の作者も亦
さぐりおさめて、不ゝえんちおもひたる日僕集乃
「蜘が門せまり門めくらつてやわがせこがひらばひもつゞけたるの
あるものなれんとての円をよむらへおまへよりよもやとぞいふも

やどりしはしんまでの間なき催馬楽譜は一條左
大臣雅信公作りたまひて葉室殿のことしたまへれども
彼集にも遺りたらんは用ひぬべからず又同源氏物語
須磨に「風つたへ」ものあはれなど申して御稜威(ミツキ)にて
おもしろきはかりをひとつらに書つけてもあはれなし
それは情ありにとかんとするに笑ともかけりあへぬ所なく
神中にも秋桜花葉の新しきは六帖に類ひあるより催馬楽
もたとの出所を考へば六帖より源氏物語も亦
催馬楽にもなさるべきを成しをもとめひらがなさる
といふものあるべからずとて[illegible]いはちとぞかれ顔
し待従御催馬楽の無名抄童蒙抄にも例は歌る
るをいふならとも引きをり[illegible]してひらがなと云へた

するといふし神をとらへとていふとあるも額につきてし
説とありことなくて肘と云ふといふに定かれところ
え無きとふり赤膊(アカハダカ)にて行人なりとも肘と云ふよ
いたるべからず神道にてとかりたるこしたなれ凡
の新しきもいふべきによりて次中世已後の説を宗(ムネ)とする
人多し服は儀にても関わりたる服を法として契
沖師の後古たりせば古学はすたれてゆかん世
の人気服乃しみさ[illegible]もたるかりしとあれども
手説に[illegible]して後あることを考へず聲(ホエ)のこ説
ふはいふかんや
〇古筆鑑定の人乃話に此門戸へ[illegible]證[illegible]古
人の書[illegible]

を柳も同じ流といへども人々の書る趣一様ならねバ
はじまりは同じ流なりといへどもそれぞれにわかるる人の書流を
見しらむも同じ流とみえても名のちがふなりぬは
能と極めがたし されバ紀貫之の筆乃筋は後かはりけり
小大君（女房人なれども後の撰集に入る人也）にも伝り然るに其流わかれて
もなくなりしといへり 又其後は西行法師と藤原乃
政子（俗に称二位尼御台所）の筆跡やもよけれども今まで伝はらずといふは
不審なり其人がら気象知るべくもなし然りけれ乃
事なきにしもあらずいふ人乃難き其道ある人にとふべし
○探題の画ハうたがふらしてあるもあり其の力あり
されば人ハ其力を得るとも其さかりにうつるべきのちのさ
かえをのこし定家卿の筆をまたふかく一人なし

づつらづら見てみるなれども定家卿の筆と云ふべし頓阿の草
庵集もまたしかり草庵集を倣（ナラ）ひて哥を
よむ人すらしきてかなしくて力なきものなし頓阿
師は然るべきに道にて限なくなるをとめぐらして而て
こころざしを得る人豊かとやさらしとなくはず用ひしもの
此ぶりよくは味への限なき風味むくろし西よ今の風
まことにそれ故にさきの南にしみ年をとりくるふ海
ことにうつりてやがて世の常に上手流してハ何ともん
のまことみなにてよしにあらずして神も感伏せらるれ
其趣意乃妙処きこゆるなし
○伊勢国多気（タケ）国司村親公乃撰へる多気（タゲ）窓（ドウ）
蛍（ホタル）といふもの二巻ありみな文雅ありしは文中に

ある也藤書ふとて世に知る人まれなることを述べたるある人
乃もとより借てみるに其藤異教の端書しるしけるは
天正元年十二月也これよりほどなく信長乃
奸計にあたりて命をうしなひたまひ家たえにけるは
いと痛ましき限りなりしにけふすでに唯居親房公の余光を
失ひし次とえくて其代々にはめづらしき文雅の道
もちゐし也伊勢にてつまびらかなる蔵誌なとを手にまかりけ
まかるもの出て其中に意をそへらるとも一條兼
揚く一青東の家にありて伝ふるものありしを傚ひとし
いつし久我家などにもきこえたるに相かはりて當家へ送られ
きわ多元乃別荘に絵書せらるに安藝守清盛
厳島の八幡の社の作詞も及び次書也是は度會

延直が書る絵のやうにもあらさるに彼八幡は東向
なるに海をうしろにあてゝ書られば西向なるやうに
いらひて難しけるふられば絵そらごとなりといへども
にたえて絵図ともにはあらずなるにうまれなほさく
あられぬ違へまさる例しとやせむとあはれきに
世のためふさうとのことをもて此国にかかりさけ
貴乃ふかその所にすびえ放逸の作者乃事にして以上
閑田云此書る唯延が作は也といひて信ぞるにて
古義にあるかるやかやは近年まではあつらし大森了雲
といふ人はよく西をたうらしけれども名をなれば
のあいへなり西おぼ通して真に遠きがかなふべしとをすの人
にわれよしよしよしふるはなといふべきや

○前編に安覺良祐別人なりしと疑ひ
しを此ころ二條專念寺現住隆圓上人本朝高
僧傳中此師の傳を書うつして贈られ全く
一人なることを分明なり。其文云。釋良祐號安覺
一名色定。建仁榮西禪師弟也。甫七歳歸釋
氏習業。良印學頭剛記捷穎。種智夙發。讀書
五行並下。操觚千言立成。未盈冠歲。博綜精
通。誦法華四功德之文。始志全藏書寫之願。
奔走四方。紙墨化人。一時緇白資助者多。孳
孳力書造次不歇。雖行程之間。必具筆硯。筑
之吉源觀音。香椎。箱崎。豐之彥山。淡之武島
等之地。遊歷蹈遍。踰海在宋。餘十寒燠。暗記
一藏。不舍寸陰。還止筑前田島。住香正寺。祈
素願之速成。日詣孔大寺。神胸帶經案。行歩
揮筆。永元初年。終功。一筆凡經律論該計。其
部六百三十八。其卷二千七百四十五。其帙
二百五十八也。大宮司宗像氏國。與祐雅好。
捨財建堂。度神祠側。祐自彫像守護真典。鎭
西奔贍。香華贊禮焉。以其年仲春。祐告徒曰。
望日吾行矣。至期持念誦安座念佛。諸徒圍
繞。及日停午。瑞雲覆院。音樂聞天。祐忽曰。時
至矣。叉手當胸。辭衆而逝。顏容如生。葬於高
天陵。歳七十三。臘若干夏矣。贊初に鶴林玉
露の文を引ていはく古今一人なりと 枝葉篇

世の盛美なり。
右高僧傳は看人すくなからんと本傳全文を甚まて
ことごとく譯せしに又近年大典禅師安覚か筆の
解節經八十五行をとらる長楽建禅師といふ人乃
よみん跋を加へられたる文小雲棲稿にあり其中
にいれ文治三年丁未法師二十九。肇業華嚴
經至安貞二年戊子而大藏既已成矣中間
四十二年。中略 其跋華嚴經有曰。昔釋尊以三
七日口之今弟子以九十日筆之説之与書
雖異開悟得脱是同偉哉斯言。苟非菩薩乘
願輪以格焉能如是乎。此跋の文もまさあれは考
よくあはれりて年紀なとたかはさるにもれたる文右本傳

某年としるしを隆圓上人考て法師年治元己卯
卒去寛喜三辛卯二月廿五日逝とまて贈られし他に
香月牛山著安覚辨。伊藤東涯の秉燭譚にも出。安
心雅敬記といへるにもたうりもなけれどいふも高僧傳
の舟しなんなどかり此高僧傳は元禄十五壬午
年三月美濃加納盛徳禅寺師蛮といふ人の著されて
此傳と婆羅門僧正の傳とは殊すか力を盡されし旨
甚だ例に如菩提仙那碑文。安覚法師行状。是搜索
之珍奇若為州續則非好古之人矣とあんもとあれ
されば因みに婆羅門僧正の傳元亨釋書にあれて
なる所譯して左に掲ぐ釋書うれ釋菩提南天竺
婆羅門種としとありさ支那五臺山を登りし時一

老翁に遇ひて其問ふ意は文殊を拝せんと也と
答へしに翁曰く文殊今は日本に誕生せられしと
かくて本朝に赴く天平八年七月行基法師奏して
聖僧を迎ふるしかるより禮部鴻臚雅楽三綱を
しく綵帳に向しむ是より高僧傳に挙る所
は南都戒壇院凝然婆羅門僧正の碑銘のまゝに
傳法弟子修榮著す是本主に随仕して親しく見る所
一毫の違ひあるべからずといへり先名字はざるなり
釋菩提仙那南天竺人。姓婆羅遅。婆羅門種と
といへり天竺にて十六國九十六種皆其徳風を
仰ぎ唐にありても緇素尊崇せざるはなく
五臺山にありて文殊師利を拝せんとするの一條は

なく日本の使丹治比廣成留学僧理鏡等唐にありて
芳誉をきゝおよび来朝せんことを要めて請と記せし東
帰の船中風浪甚しきにありて端仰一心入禅。須臾風
定波息すとぞ釋書にあるもより渡来の年紀は同じ行
基相見。和言梵語往覆欽密。宛如舊識の條は三僚
供養の導師三年僧正に任ぜらるも天平勝宝東大寺開眼
をしまる郎迎せしとあるも同じ天平宝字
四年二月廿五日遷化も同じ享年五十七逝前三日
舎維那於登美山右僕射林。那臨滅度謂諸弟
子曰。吾常觀清性直厳自性身而猶尊重彌
陀景仰觀音汝曹抽吾帑藏衣物奉造阿彌
陀浄刹文云。吾生在之日。普為四恩。造如意

輪像欲更造ハ大菩薩像無常行迫甚顔不
諧宜告相助畢功矣弟子等遵遺旨修飾ハ
像又刻肖像並置大士傍焉賛ハ前に挙るご
とく東大寺にして雑集を検閲する中に得たりし
○親しき僧戒壇末派のつゞきに時人傳を著
せし日如立和尚と謀りてと別して其行業記を
書して仮名を以て譯して梵陀羅に収めんことをもとめける
然れども予義学のことにうとく義評もなく次り名聞よ
はさ理義につきわかたれ難しといへども其道識る
人に思ひよりて事を採りて大きに筆を折りて
安覚仏師のことを録するにのぞみてこれを次づ
和尚名は慈山如立ハ字也唯忍子と号し俗姓は

和田氏母天人懐に入るとみて娠む幼にしてちゑさとし
ひとへにいへども父母愛して許さず十七歳にしてつひに山
城国花山寺雷峰に投して薙髪染衣をとげ字は
んとはくして夕べ暁に懐ひめぐりて猶さとらずして忽ち
如塊をさとれ携用視前を師にうかゞひ印可を得れば自ら
おもへらく自申を得たりとして飄然として四方に遊ひ
寛文四年近江坂本に庵をむすびて山水に心をなぐさめ
八年に一友人其人乃ち在ることを見てまた其もとに
あり是より志を発して洛東泉涌寺に往て華経
を閲て未半するに悔ひ悟りて記を成すと共に自他を
兼済んと誓ふ閲蔵解りて桂尾山に適て戒をとらん
んと欲ふて其一律師に従て遇ひて疑ひ所をとふ

ゆへしらたまひし次且其人内に白衣を着せられしに
よろこびて次復坂本に帰る瓔珞の羯磨本業瓔珞経の作法なり
二百五十戒也羯磨は作法を譯をコンマといふに依り自誓受
如字カツマとも流義によりて唱ふるぞ
異し更に多情乃身に出家するもの一線をこへても身に
纏へど微塵とこへても喉に入ずや誓へ此ふりて従
光雲庵のもとに憂きをとへる当時はなくての受戒皆
瑜伽乃羯磨の瑜伽資地論の四十八教戒によれりとぞ梵網経を用う是
に異なる故に人多く譏とをみ沙弥即須疑詩を作て
其局見を幹ふかくて山中は諸悪論者小乗の比丘
大乗を混乱をそしりてはかなる際を逐へ故に坂本
をさりし山城摂津の間を遊び後梶井宮盛胤法
親王の請ふ應じて小野に止る又結與居士といふが

庵を潜東国詩才構へこれを取て此間僧侶の
化益甚多く流球の僧法を求めて来る者和尚に
謁して後臂香を燃し初故国にありし日本に至
て善知識に遇ば必此事を行ひなんと誓ふに酬ふ
といへりかくてならぶ元禄三年正月其母儀没ぬ自
後哀情内に纏ひ少年節をとくに師もまことにひま
疾なりなりけり十月二日に化し翌日其徒にふるふて可
寧あり因即心念佛一心三観これ吾修處也此筆
あまりをこゝに留めば且暮我に遇ん我死憂ふる
ことなかれとて又其夜弥陀像前に合掌念佛し終
りぬ中道即法界。ゝゝ即止観。ゝゝ即那那那那と
いへ何ぞ南无阿弥陀佛。ゝれば則念佛のかに止観

なく止觀のかたに念佛なし能所は情の派とこゝろ
法界は智の照とてうるを得者同見これ所詮
の用心なりや和尚向吾は平生隠絶の昊天なりし
此外遠近の徒弟に垂訓の法氣平常のことし數又
十四願十八門人全身を北白河に葬る和尚初め
禅を学びしかども花中之大部をよむに及び教觀
大に備る事をさとるより故にんと天台四明の学に
潜め宗を更めて其の衣拂を雷峰に還して時に年
四十一其後天台一宗乃律法所を含せて四天下に來
これより盛なることあまねく方に當るにおそらく山家
の正統たる所以と識るは和尚の力なりとぞ和尚
元來性強記一覽法華を悉く背にせし其撰述

せる慶圓頓章句解。十重俗詮。三千有門大義。
始終心要大義。心經略解。野山艸集 詩偈雜著 此外
行るゝとぞ嗣靈空律師其志を継て安樂律
院を創建し法流盛なり和尚の詩其生
涯の志を看るにたるもの傳中に記をもらすによつて
寫すとし。幼若人生絶。常悲嚴序徂。趨庭寧俗態。
入寺作禪徒。解慕馬師秀。行欽船子殊。忽忘
機境了。祇與杖鞋俱。說話自茲淡。威儀緣底
拘。要同雲裏鹿。期等露中鳧。一旦蒙朋諫。多
年究聖謨。升簾鷲峯月。落几鶴林珠。初識闇
時莧。不如明處株。興懷禁絲革。發誓護衣盂。
方入宣公域。更遂智者郭。設房隣此嶺。披帙

對東湖教眼彌昭尓。文心益鎔手。六塵軽白
雪三觀熾紅爐。持号天將暁課經日又曠。豈
思遭讒害儀去背招呼。野雨祈介倍村燈錫
影狐毎離泣慈母數病傍頑丈當此澆風盛
未看信手技何時損執受直得待金軀。又歌
集一冊ありけるハおしへにふ学なれどもんく次東
にありよありて述懐經文の心をなして述ゑぬし其
内其教示にあづかるよりの一篇摺るて
無我無造無受者善悪之業亦不亡のこと
をふかりせしいかなるの経典も見えはなされ給ひられ
心を論じすべくの色即是空の義を明らかにせし
なりなれどもの之業にも怖畏をなせじと候へ

さしいで峯に出て
色もなく空しとされたるれば花は紅なしものなるなれ
西方のうちよりかへる中より
わが身は花の色のみに浮ひつこのよはこのまにてそなたれ
法華之妙とはさめられし戒根清淨の事と
感しられて
いせもの給つはあらえかづの貝も手づけべきにうつしたり侍るに
ごろうかしむ
我按此律師ものじめ禅に参して後義をうけ
ひとむ栄西禅師へあし台家うけて僧正り
登りてまづしく入宋して禅法を傳へ帰朝のち
これとはめなかれは法然上人比えの学

五行聞えありしかバ浄らかなりと興ありしことなりかし
づれとその是非し何ともいふ非とせんとつくづ
うし待まうけらくにはまして人々も済度せんも
成べしこれぞたゞちに釈尊ハ七子の孝の教法
を説きたまひき

○竹苞鵬鶚氏話乃ばいかに所云日件該と承侍其
第十六。寶徳元年閏十月三日。長照院竺華
来過。竺華曰。吾翁大椿築紫人也。少年東遊。
就常州師学四書五経。始聞孟子講。時食不
足。就人求豆一斗掛之座隅。日数一掘以療
飢耳。如此者凡五旬。後将聞易語而乏資用。
為之西飯紫陽。求財於親族。得銭十五貫。因
持文東遊。遂得易学云云。同今時如此国学
者不復多見之。閑田云国学ハかくまでに称せられ
人といつぐりてまさに学文の廃れたる事も悲し
筑紫よりて四書五経を学びけるも此きびしけるし
関東にいたりて後に本意をとげしハ村寿齋の話
に如翁少年の時何事毎に四書をならびし孟
子ハ本なりとて教へけりしとかや此寿硯
きたなの時ハ文学の学は絶えたるがごとし昇
平久のむかしハ山陬の村て海島の涯まで年を
追ひ月日をそえて文筆盛に成りてゆき一部
一人の間にもあらず教導する人もあまたの沢
きこゆるはひとへに御代の恩頼しかるべきなれ

てはまづそのあさきを中〳〵に急なる人は出しもすべし
○事を類せるに年号めるありやはりとする所
あるは千類をも並べ挙るもありて殊に聞えば四事不可
以久とて春寒。秋燠。老健。君寵。此中三事はいふ
にもおよばずただ君寵には必ずして意を用ゆべし
三利といふは一年之利ハ種ウル穀ヲ。十年之利ハ種ウル樹ヲ
百年之利ハ種ウル徳ヲ。此三意は種徳にあるべし
○茶は類聚国史にみえたれど久しく絶けるや弁
上人入宋して将来し栂尾に栽給ひしより弘まれり
されば類聚国史に見えたるは学ぶ人稀之国ふりにて今世茶れ
をあつる人と茶人と称て西土にて茶を採製する人をいへり
閑田次筆巻之三終

閑田次筆巻之四

雑話

○予が識る人野遊して出たる時ふと虫耳の
中へ入りけりかゝる時は人の耳に蟲をとめれは
其香をとめて必出るものなれども何やかや
そこらにはなきを、さてはいかにもせんかたなかる
べきを其友なる人率にあすれども眼も口
も鼻もみなとぢめて入る者の耳より
息をほうく吹入れければ吹きられて他の耳より
ちとなく虫出たりしとぞ友なるがものに社

そうりん服すべきことなり

○小児多病はきよる汁を炒ての子よりいうふよも
せんうさなれば救琢乃譲(タベ)をうれいよふ妙手につる
めさきを力にしく汁を引出さきありあり(?)も汎(?)のの
きさるにみて死するも多分ふ痛苦を救(スク)へること

○小児蔵(?)虫に犠を呑さるゞう喉に滞りて死しする
ゞうなりさいてみ吞しさてよしとは鳥芋(クロクワイ)を多く喰へば
罯(モシ)自(ミヅカラ)喰へることならざれば挨をうけてゆれ我は挨なるう
嚼(カミクダキ)てその口へ入る
もゆるうそ降下すれば滞ら次これは本州にもなうる
きよなれども大かた医なる人は知らされは急に待る
ゆえめに閑とに死さん

○嬰児(エイレミドリコ)のよまりふ泣入しと腹痛なうんとして医を
求へ頻りに薬を用ひしかども其験なく遂に
つひに死したりそのうちに死骸を見れは背に蜈蚣(ムカデ)
喰付てありし背をたゝきしゆゑ次第に泣しれ也
故なりしと其頃の人はこれを家の壁を干せる
時はさしもと其家次第に[illegible]しと家に非命なし
て其家の前に[illegible]嬰児の泣きくも出しく胸
[illegible]人共[illegible]
家数に計などおよそ[illegible]
ようしん[illegible]つくべきものぞかし

○ちかころ飛弾高山人紀引之よりの書に同國
高原山中に谷あそを食用にせる常なりと
ある人暑さしるに彼ものを一掬(スクヒ)呑て

さぶらふに其水谷清起州に腹中雷鳴しけるよ
り療治すれども験なく、あまた故老に大蛇の住けるを
ゆゑにより其毒に当りしならんと或人考へて
古釜乃類の鋳物を濃く煎じて呑ませければ
平愈せりと又蛇の蛻(ヌケガハ)皮炭薪にまぜれば鋳釜破(ワル)る
といへし其時羊蛇(ガラ)を火に入て焼ば忽ちものごとく
なわりことも無絶えず降の菓子を取乃しける
せる釜破れしを二日の後に好き者を開けて釜
の下に焼るべき水はもとより泥なりけれども跡へそこと
入てより後十余年のちに又同じ家にて菓釜を
のぞく破れしをこの次には更に羊蛇をこしたれ
ば頻(シキリ)になりける水忽(チ)やみて其破る事もなくつゞく

ときれど急なりしとつひにせまりければ病なをり
○羊蛇すて蜂の住しるを探すとは急ぎ急ぎてあやか
はう浜村中の小児蔵まで行わびて足をも蜂に
刺(サ)されてやがて羊蛇にて探りしとて背中に
かゝり痛みて渋(シルシ)を見る也又はつゞに急ぎを抄(スク)ひ
とりたるは舟中にて刺されるも人あり
しかば折節蜂薬を入れたくは鳴(ムカデ)蛤にて刺されるも人あり
て甚疵(キズ)をうけければ即(チ)蜂の気をさゝへて止まり
あれもみな人の即時の傷(ハタ)によし
○又臭(マムシ)の刺される毒汁気血をまして上逆して害
をなし死るもあれば刺されたるをほどきて
手足をかゝれるは腕に針を即時に抜(ヌキサシ)去れば

後難なしかれども又ある家に秘せる法干鰯（ホシカ）を濃（コク）
煎じて剤とする事は腹痛をやむるといへども毒氣も汁
もろともに速に治せず猶菌毒犬毒は甚しき
死するもあり此治方も多けれども是は医のよく
知る所なればこゝに贅（ゼイ）せず唯その術に任（イ）せ愈（イヤ）
まさるべし愈（イヘ）ば切りて血を出すべし毒をもつて
ふるめし變人氣によりて病愈やまざるものなれば忌長
○江戸にて或小屋の宿直（トノヰ）の番（バン）葛籠（ツヅラ）を負ひける
僕に雷火落かゝり持たる葛籠の間より下へ抜（ヌケ）
より僕は氣絶して身をやく焦れたると同僚（トウレウ）の
奴共たすけおこして走りけれども生鯛（キ）を衣にてより
見るに子細にて彼焦（コガ）れたる背をひきさすものなり（ナリ）さ

されば黒き氣にふれたるがひとしく氣を吹返したりとぞ
これも近きころにて其侯邸のものに語りし也とぞ
○はやてふ世にありけるある時青根乃士文子居間を
異りてありしが雷鳴甚しく近く其子のゐたる室
へ墜（オチ）る音とものすごく又やがて走り出ていひけるといへば
これふ行きて烟氣の中よりこゝにいでてみれば半身
焦れたれども氣はたしかにして療治して平
復したりしとなりかつしき豪氣の人にてありけるとぞ
なり元震死せる人其身の焦（コガル）る時は婦りて来れ
びく肝を潰（ツブ）せるが多し或は墜（オチ）たる處は漆（リ）なく
て千滸の人の震死せるもまた中の家は是等の節に
觸（フレ）たるものなりとはいひてもひとつべし勝（ホン）ざるく

すれハ不被(スクハス)といへり信すれハ雷の臍を摑(ツカ)むと
いふも然らんか
○僧玄盾東国行脚乃紀をあづまみちと名つ
くその中に雷獣(ライジウ)をとりたるよし図のせたり
図をもてこれをみるに狸(タヌキ)の類にてありしとみゆる
ある人のもてある所左のごとし虚實ハさだかならね
いづれもいひつたふることを其人のいふにまかせて
こゝに爲とあく

享和元年五月十日夜藝州九日市里
塩竃へ落入死ス雷獣の図 大サ曲尺一尺四五寸

○但馬豊岡の人語りけるは同其国氷の
山といふは播磨美作因幡に根張せる一箇の
山にていふ登ること五拾丁にして六十六体の地蔵
尊あり霊験のあらたなる其麓鵜縄村といへるの
女と童二人つれて草籠負ひ谷筋へ入しの橋の
下に長け七尺斗の蛇ありけるが屍を背
に逃帰りてそのよしを語るに村の者ども色の
あれは猛獣をも捉ることを常とすれば是に猶よ
と携へてもちふ彼者語りけるにもはや又忽れ
るとかくもたるれば怪しく窺ひて角一つありしさえり
て身は木の葉の色に金の光を発ちけるはこれ
の青龍の出でたりとありければ橋よりかへて角を
捉るのは是ぶ風情ありしとぞ人みなはままさかすで奥
の河より河を隔てた八間斗の所よりは全く金色なる
が脱捨ありしこれも同じきの神龍の所為成べしと
いはば悪龍毒地の類ひにあらず治まる御代の瑞な
るべしまたはあらしれ杖の実のりたるも会され
きこえやしといつも

○南都の人の話に松虫鈴虫を捉らんとて挑灯を携
へて夜ありけば其光をさして飛来るといふはむかしの
ことにしてはわがたりには鳴きくを費すのは行と二
本にちて蓮の蕎を擦ふれども鳴きて飛去る
故捉ふ又猿智者は蕎を掴みて吾と庭に棲む
無しくかかる虫は蕎の中に卵を残さはちょしの卵米

ゑもの枝にとまりてかしかましく聲をたて吾庭にて生
したるをとりさし竈にこめて責ればいよ〳〵安し春日野
みさご虫も擬葎も根こそげはらひとりなんといへば
きてすみば世の中の事あつかはしくつらくもやくなりて
眼前に利あらず後の不益になるとも勘(スクナ)き時人
停まりしる摘くさて辨利になりて寡婦乃糊に通(トホ)
しくなれるぞとして又扇を觽(セサク)すれ鯨要(クジラカナメ)といふてらし
付もくこれに倣(ナラ)ひて利を得るものもあるらしぐの要乃
めけたるものすくなくなりて是らも本あらぬもの
角りて要を造る者もしくなりてもこ扇屋も
まさ扇の損ぞるとしてすへくなりしハ大なる損なり
と祇者さりさ此世要者もかくりこくなきあれそ

労すさいつりふハ人とも亦得やすきことをたるとかく
價(アタヒ)減ずべし
○凡惣智ハ才に出ず才は筆に頼ひあるのなり
さやうなれば其身を立家揚使が才とする書操
なはくてもはひるにそぐたゞに殺されるぞとしこく
評坂直好才智辨といふものを手わしそれこふ字を
風月の君ハまさし世教を守べくは凡は才と智と
ひらつものなたりにはれ共も法とふらへ其こりをあぬ
ずしらくを指揮(シキ)しさ視よきにそれてしるもの
智なり才あるんはあまねく智ある人ハまれなる
まれるとそらとし心ひつき勉よくのにおちもちうし
千里の駒も鞭(ムチ)すさ指揮(シキ)せざれば躓(タヲ)る風よ胸

かゝる平船も梶(カヂ)の制なければ溺(オボ)るゝ事すくなきに
任せて智と用ひねバうつくしき身を損(ソコナ)ふ事も亦多くの
ちらしこそら世路へはだに才の活ハすくなく人をしも
それらし沢にうしたがふ人の身をたつるよしな
きの多くうちこゝは学びのうちのそこなはぬ沢もすぐる
士農工商の世にはしゝむすびにも心性をこゝろわすれ
ばれなんやまちかなふ所べしまゐらすことればおよそもの
おほくかり才ならんとて智をさへおぼろげならぬ見ゆるものでも
こゝろき御徹をとうきしても伝へ聞えんとてうつけ何かは
いましめとなりや（記のごとし）
○衣末智辨おりなしとて息貨規ある学道の僧
にもありしふ其人云佛経ならずいへど智いかなる人
かしこく用広し猶凡人のごとし沢て恵ハ賢人すよ
比すべし才は衆人凡才にても智をおはすれば浮世
の日用を隔ゐても見るも拙きふそ働きかん安
きこともとくも人皆迷ひて才をたゞちに智とさだめ
智あるも拙なるものならねども沢才ならずして恵れ
や善みしく才の及ばざる所すおもう沢とぞ
○又ある学道の僧世に名聞をとゞめし名高き僧
ハ女犯肉食よりも甚だ罪深し女犯肉食は罪と
其身に止まる名聞の罪は他に及ぼしむる相者人
に語りて我男(ムスコ)夭死(ワカジニ)相あり其月日必死すべしとい
で語るに其期に及びて常ふ妻ありしかなりければ彼語
を聞きるもの相の真ならざると思ふて一夜ふて死

しかりとてまつたく實に相乃疑はざらんことを
おほよその徳もなかりせば己が說の違へることを知て寤(ヒノカ)
に其子を殺害しゝたなり吾今にもうしてしかも
あつかふことを知りても其術の名聞をさへぎることを說ける
つる佛乃教誡なりけるや

○ある說にはさきて宮所へ出し律僧低頭(カシラヲサゲズ)せざりし官長
これを咎められしに律の戒法僧に對して頭を低(サゲ)ん
とすることありければそのはかりにて退きしめ彼是の僧をし
て其方をえらばれしに或役寺の僧とられハ一應は尤
なれども隨方(ズイハウ)毘尼(ビニ)といふことありて毘尼を便の
宜しきにても用ゐ此意はかならず事の宜しきに從ふが
所爲なり是をもて詰(ナジリ)たまへて申せしかば次の其僧
をかれしは崩れ去りて頭をさげたる時に隨方便は
いふことそのまゝ魚鷺(チ)はしごくて稽首(ケイシュ)なりける
說のことハ次にして先不敬をとがめられしこと兼りし
なりし又華頂山にても末寺乃律僧と寺のことふは
きて印を押(オス)べき事のありしかば役僧をもして指揮(シキ)
せしかども不肯(キカズ)律は印を押せぬとていひしかば
役僧もせんかたなければ印を除くべきよしいひしかども
遂に老僧にいひふくめんとて問しに答ていふ印を押
すといへば用ひし律僧乃僕(ボクヌ)ぬを具(グ)し挾箱(ハサミハコ)をも
しかれどもはんはなしで用ぬといひわたし教られしかば
老いたりしかたに語りと侃(ヒ)かやうなることその時て押
しかりとて國に入ては其禁をまもるといへるも同じ佛教

もし人道のかたくなるや一愚(グウ)とのゝしる擔板漢(タンハンカン)ハ名づくべし

○東福寺開山の時よに癡兀(チゴツ)坊といふは道人にて悩ふらしが戒律僧本流と出あゆく佛制をしれ律流見流おほ用るものゝ子といふしに癡兀(チゴツ)坊おそ何ぞ法義のことをといふとわするべ答ひけるゝ事をいひをきけれど嘲りもして此坊ハ寺法をのきくよせ

○ある人尼といふは夢想国師の弟子なりしか学ふ傍ら寺門のあづけてたく桶の底ぬけて水とも月もやとらずとよみてし此歌をなせしハ千代能ぐらも作とも見いふ尼の作る也此の尼乃徳ハ実ハとゞろかざりし爰想乃弟記よせるりとそらふ徒らされぬ者にて穏なり

○元亨釋書ハ著者虎関禅師ハ其父微官(ビクワン)なりしかれ小僧の竹宮家乃童子達に蔑(ムレ)なづりはいまて其父の微官なると朝りしめんとて名を其系譜をいひて此僧と遊べしといへり皆大中納言の息なりしかバ虎関ひそかに大聖釋迦佛乃法孫師錬とこそいふべけれと一句を飛越されバ皆いひてなく〳〵止ミしとぞ

○聖徳太子片岡山にて飢人にあひ給ひし是達磨大師といふ説に付て其日十二月朔日なれバ本朝の達磨忌ハ十月五日にはあらずと虎関讃せられしかども禅家のならひにていまだ此月にことといはれ今も東福寺中海蔵院派ハ其日より行ハせつゝに彼片岡山の飢人ハ或説に文殊菩薩ともいへり年老たるれ共日本紀にも異人とのみいひていづれの菩薩とも大方見えずされどもらけれバいふしく人ハ正しとのべらし

○近来黄檗竺庵和尚遊山のをりから猟師が鉄炮を打ならすを
きゝて侍者の僧にあれハなにぞと問けれバ又一人いはく虚(カラ)なり
といへるを和尚聞て日本にてハ空虚と唐土と同じくから
といふ語を混(コン)ぜられしが和尚ハよく和語に通ぜられしかども
されど異邦の人なれバ時に違へる事ありて急にひとつを
叱(シツ)せられけるとかや是和漢の語混じて聞ちがへる事は
ありしぞ唐音をよくしらずんバいかでか此事のまことハ
論すべきさまなれ

○同じき竺庵和尚長崎桂州和尚に語りて曰
唐土にてハ我等年中独参を服用し虚弱の身を
たもちけるに本邦へ来てハ味噌汁を喫(キツ)しけるが為
に独参に及ばずして味噌の効(シルシ)を称揚し語りけるとぞ

彼土にハ味噌なし長崎へ来りて唐人が日本人に
ことに臭(クサ)しといひつれども彼地へ漂流せしものゝ店
ありて味噌を送り商ひするにおよびてハ語
をも聞しく賞(チン)するとかや味噌も異人なれバ何もあ
まけんかし

○黄檗開祖隠元禅師ハ烟草を悪ミ給ひて是を甚し
偈よみて一管狼烟吞(テ)復吐(ク)。恰(モ)如(シ)炎口鬼神(ノ)身。當
年鹿苑有(ラ)此草。不(レ)説(カ)五辛(ヲ)説(ク)六辛(ト)。此偈語録にハ漏(モレ)
たるよし肯彼宗徒に聞しが遺亡せしと又此沈
一和尚語られき座禅看経の勤を妨げせりとて
悪ミ給ひけれバ今に至るまで此宗にハ飲酒ハ彼増(スベ)[illegible]
さるゝを喫(ル)事なりしが當時ハ不喫人ハ却つる

斗しらず律を名として唯其衣乃穀のしくしくと
存しまる寺院もあり侍宮乃僧坊の酒樓ふな
らうも漸々に祖意よたがひ来るもの霧（キハヘ）わるなれん
○茗ハむかしハ常時のみ見ざりしに口を糊する
人世間ふ満るもの茶と烟艸と此二品の具をと
造る人も支ふ事多くあるを然ども尤き代
ふれ行をしけんとおやしまあくて計して又茗は人ども
に用ひ今ハ用ゐる人稀なるは烏帽子も此れも稀なり
○烟艸ハ唐山も此方もたかく二百年来する人
の嗜（タシナ）むものふて一たびなくハ忘れがたき中よ
相思艸ともいへて蛮国より来る此に伝はれるふ
て本艸備要などふもそこと出して利害を論し
害あるよし其は新きにあらで既に極老まで
嗜む人にしらるる害もなし然れども亦此ぶくして例せ
ば菸草は食物本艸の類害多きよし記せれども
本邦にては中古の頃よりしてそれまでも飲はし
にあらで或は糠に漬しては猶よ喰ても一人も此害を
みざるなし脾胃に利ては害なきもあれや唐山の
人乃獣肉を常ふ喰ひて其害をこれに除くといふ本邦の
米は美味なるも泥滞をおこすゆゑにいへるに同し此もの
石先醒乃ふ茼をのべてふこれも大きに烟艸をぬすみ
よみて且仙意乃烟管（キセル）を得て喜び賜へり古詩
長篇ありかばしくここふ写さず

戯謝洞巌老恵金烟管二十韻

桐思千萬里。芳草既為烟。遙謝琅玕贈。何酬錦段鮮。班々汝涙竹。艶々並頭蓮。鸞管長且細。螺杯小復圓。彎如篆梟曲。龜若馬蹄翩。聊比繞朝策。何論武子錢。碧筒宜共飲。青筒豈須編。王衍曾揮塵。蘇卿本嚙氊。趣同餐蔗境。狂似嗜荼顛。絶勝松柳醉。要將桃李憐。丁香香自結。柳線々猶牽。朱燭龍啣燭。丹炉虎伏鉛。飛灰金琯肉。撃節玉壺邊。流水歌幽雅。蕙風和舜絃。惟中非借箸。陌上是遺鈿。不羨餐霞容。還懐服氣仙。吐成玄圃霧。漱作白雲泉。掌琴心良苦。紐蘭佩可揖。微陽田黍谷。尺寶出藍田。因知蓬瀛侶。徒勞採薬船。上以私加点

て童蒙に便ん

又ある所にて烟草の箱に手付そゑよとてか
手拈姑射千年草。口吐蓬莱五色雲。何人の一聯
にや詠物なれど落後なりやとて此一冊に綴べし
○路の竪横京わりて曲る所へ必真中をとおるべし
ゆゝきわんで曲る角なる人ゝ必ず当たりよわぬなお
やまらうとうとそとげひよむつづつ戸ゝてたれれとしこは
おのら、親族の老人数られと？て細きめたる
ちくゝおほくしにそよ沈ある者の遠つくよ身
をとうらわせく久しく在やうしてはつゝし驛に牛馬
又荷をわ持てる者に出會てそらうせず死せる
もあらずなし幾乃二三寄とつきりし馬卒販夫の

新羽ハ必曲る所をも行ときハ心得べし
○路を行人みぎりふ左にふりよ行ハ常の禮なり
むかしなれバ牛馬にはきものなれも其付る方ふ當
まばなるやうちすまふし然るに薩摩の辺てハ是ハ
向日の照りさへ行日陰を人に譲る又ハこれを
反をこそし路をと譲るの禮をかりけいふべし又い
づこの國の男女も路をこゝふ逢ることを常とすせ
りやこれハことに心得たまへし○
○平が家にもうつり侍る古画に石をと車に載
さまる人数串図なり大佛殿乃石垣乃石をと運
ぶ所の図としといふ人もありまた或人へそれよりも
画乃時代はありまた年なぐりやとらん申もいり

垣乃石うけ堀なりども平らりのう所さにうんぬれば
城普請のことも知らざれど堀乃様をみればよのづし
唯路ぐらん申私大佛乃此石も其大きさし出説云
大佛殿の石をと運ぶ所東の方よりすゝむもの
追手のこ所さ松坂の辺其難難なりしかバ加藤
清正音頭をとりて松坂こえさやりさと飛びて
やりくずれしとこうりて踊の音頭に通りしといふ
をで伊勢の松坂とよばれしるは同名なれど彼名
高くゆゑなるなりとこのまゝしとぞ平が家ふて画事との
童子の伝へよも人によりつゝの云ひなふるもよしと
に一所乃壮観なるべし思へば一画に此図左
に写すて此佛殿乃経営すゑて金銀の費をと厭はず

美麗をはくられしとなれバ自然の石家なども けるや
かたるもけんうし石は諸方より集めゆかりが摂津国
武庫山乃ふたに運び残せるものとて其所乃諸侯乃
名所なる石ども列しふくめ此山今も大石多し
○松卵ハ松の子乃ことなし唐土乃通字書箋
といふハ家乃松なりしが乃この通説なりしを
西国かくハちがふもいふ語の意は不解とされたる
ひとへれ東坂あたり来しが坪ちんころと之国に山崎
の者ハめんころと唱てちんころと覚へつめんころと唱
それと争ひしかれおよぶきくの是非と争ふても平亮
同じられバ彼も亦一是非此も亦一是非と南華
老人ハいはれあへし

○高野山にほとゝぎす沢の澗に落(オリ)れたるが本の
節(フシ)穴(アナ)ならぶかゞ得りしたとてなぐちもなくなる
それハ得動(ウゴ)かさず餌で子をしたゝり得せ無
ば雀がはじめき餌をとゝろくまるやし乃夏
になるまで其へいりし不思議なることなりとて古
まるど雀のほかにもかへはりのまれも食のことなくて雀の
それも食あるといふこともぞ去つた甚遠の山賊
ともまた文字を探(サカシ)出して焼鳥なともありて食ハ甚だ悪
しかべし甚情なきことなきものにいかん和田泰順
鷸どの説なりがたに百舌(モズ)鳥の性茎(クキ)なりどのを
みへたどの傳説ハあれど雀乃郭なとやしたなる
○といふすとれめづらしくきゝまうふしる沢

○武儒士某母に仕へて孝を盡しけれども其
母乃意にはつゆかなひまゐらせざりければ母は
しれものゝゆくまねして庭下にうづくまりうかゞひしを
埋しそれに物ごゑして人の来れバいづこまでもゆけバん
なつは一日もの思ひしくらしんのごとくといへりしを聞ては
じめてんはよこゝろより仕へ乃やうを改めかくし己が
相識一老人も其男(ムスコ)の謹慎に似て圭角なる所浣
そゝる人なりきされバ此心得のなきよしをとなり
○享和二年十二月の末はつかに甲斐国都留郡小明(コアカ)
見(ミ)村の民なにがしといへるものゝ其妻人の黄疸(ワウタン)に惱(ナヤ)て
くるしむを両親ふかく思ひて身代るべき兄弟もなけれバ
いかにもして病を念じさんとおもひつゝ蜆(シヾミ)は此病乃

良薬なりときゝけれバかなたこなたと尋ねもとめけれど二十
里程(テイ)を隔て駿河の原といふ所まで来りしに年の終ふ
まばらなるもの街道も往来まれなるにたゞ武士従
二三人斗具しつゝ道先きに立てゆけば追付んと急ぎ
畔(アゼ)づたひふりかへりて彼士なんぢ瓶(ナガメ)もていかなる者ぞとゝふ
農民にて候ふといふ農民ならば大路に畔をふむべう
伏畑ならバ麦を養ふべし道の傍なるは草こそあれて
耕(ミゾ)にならん大路をゆきて何ゆゑに畔をふむやとて
いぶかしむ私入唯大人に追付まゐらせんといそぎて
の仕業にて候也といへば背に負ひたる薦包(コモツヽミ)は何ぞと
とふまゝ親のやまひを答へて此沢蜆を求めやうやく此
ほとりにてふきみを得て負ひたるよしといへばたゞ

病にきはまりなては是じ江戸にかへして救ふべし
いさはれかんといへばねん頃なりとも遠しまさ
是より沼津迄ハ四十里をへてハいかゞせん辛労あり
て帰ることを急しといふにいふべけれ江戸に帰らば
遠るにおくるべしと其々里荘官の名まで書しるし
きこゝろはいかなる方便ぞとてそれハいつまで及ぶまじと
よて沼津駅にて別ぬ其年ハ暮しあくる年正月
病者ハ病おこりて十日ばかりありけれバ所にて道にて
虚白(ル)僧を請し斎をなして折って所の長(オサ)の方へ
薦(コモ)に包まるまゝ江戸に是とりとゞけ甲斐国鶴
郡小明見村庄屋仁左衛門といふ者を尋ねといふ
所乃官所より送り其使ハ谷村より小明見までの

賃をとらりしゆり無用なりとてうけねバ硯乞し一首の哥あり
身もしらぬ山の奥までもなさけにさそふは病念なべてなり仁義
千ねをとしバ硯に付て路通をとゞめそれよりして
同きく庵にて法名をつけ彼斎の所へ持ゆき士の志を解かく
借し無き文より情志をたてとどめて江戸まで送りしとた
よりも尋ねれども未だ知らずいかなるさとにあるものか此
士の哥とはなりたれば何ゝでも哥を記しおく篤志が
の行をほめせるとて志しを讃せんとはかりかけるとぞ
同国同郡乃一老僧此どろかたられき
○備後国深津郡浦上村に藤井孝兼の名は謙
字は子虚といふ男は農夫忠四郎が子として
又にあつれ好乃あふくにかる　窮居してしらぬ樵(キコリ)

野に草刈を業とし次男なる子を童よりぞらを惰(ナヤヘ)
しく生れつきて慰(ナグサミ)として無頼(あそび)の事をしけれども其性(ウマレツキ)
剛にして物に屈せず次男も拔群なるも十七八の頃
より悪(アク)き無頼の徒に交り樗蒲(チヨホ)攤銭(タツセン)の事をさ
へして嚢中空しくなれば夜到てある人の田園に入
て木綿なんど摘(ツ)み酒食の料に充(ア)つるは人も非
理の事ながら果は銭を貪りとなど次男ある時
はれ因々の集まるものに恨ありとて物に責罵(セメノヽシ)り
遂に梁(ウツバリ)に縄をかけて縊(クビレ)死することなかりしで銭を
とりたるは村人の集る小祠の木像を盗み鬻(ヒサギ)なんど
なかる悪業ども積りて遂に亡命(カケオチ)して四国に流しが
いかなる人の勧(スヽ)めかいかなる縁(ソリツキ)をか得てか讃岐高松の

儒官久保氏なりし從学次性さとしして四書を六十
日斗ふして誦(ソラ)んじぬ久保氏も教うべきものとし自(ミツカラ)
も読(レ)いてこそ勤(ツト)めけるほどに程なく業進みしかば
同藩の富商娘婿の居なるものの一にと推挙しける
四五年のうち老母を帰り省せしに容貌進退すべて本
の人にあらず次男は放逸無頼の徒謹慎篤實の士
と変せしかば悦びにたへずあつかひし村人々も席
を譲り世ると薦(スヽ)めて敬ひをそれかんでかくして人
ほこり次男の事なさし無事なるほどこれをさ悔人は
美(ヨキ)師友に附べきことなるかど語り蕎識童子に事にも
諄々(ジユン〳〵)としても孝悌を勧(スヽメ)る詩も示顧能ねて数日の
後讃岐にかへりしが不幸にして病にかゝりて地下の儒

文郎となりしが後に二十六歳なり其邑人坂本
堂は平かなにて国字をしらぬ人なれば此行状を讀勝
人傳に聞えしをしるすといへど既に上木に及びて後
けるゆゑさらに孫を周處三害の類にして節操を改
ましたれはみなさめたるものなりし實に一時の人といふべし
○伊勢國野驛にても旅人を竹籠にのせてはこぶ人夫
の者先肩を與三郎といふ後肩を善之右衛門といふ
途中にて後肩のものが金の包みを拾ひ開き見れば
拾五両ありて旅人を送りて後此金を驛長に持ゆき
落したる人をもとむるに誰ともしれざれば
拾ひたる者兩人に指揮して善之右衛門にあたへば半は
與三郎にあたふべしといへり此二人のありさまを見て者あり

此金を拾ひしは先肩の者拾へば半は後肩のものにも配
ふまで後肩の者拾ひしは先肩にあたふべからず驛路の
定として先にゆきたる人の落しけむを拾ひしはそのものゝおちめ
ゆゑなれど我が與三郎此金をもて受べき理なしと
いひけり扨しばらくありて一百錢を與へよ一分もといへど
とりあへず善之右衛門不肯論じあつかふしとりて長もあつか
ひかねたれば拾ひしは拾ひしものゝ物なるべし落しぬは與三郎
それにしといへども聞入れず驛長もせんかたつきて
終にいかなる争ひせんよりは兩人内方に分て遣すべし此
金を費すべしといへば善之右衛門大に喜びて言に従ひ
て遣でしかども同國のうちにて罪有しも遠から
ねば費をも惜しまず貧人に分ちあたへさせければ

譲り与へたれば其のごとく脱(ステ)て領主へ訟(ウタ)へんとせし
が其領主遠国なれば無益の路費を費さんよりハ實
に償ふべし唯半分にして我のしが欲する所に用よ
とさとしけるにかれもよそ之主ハ年に借銀に
くるしめる事を驛長のはからひにて小家を買て移
りすむ善事にハあらねどその身ひとしく業をとり
ゆかて信濃の善光寺へ詣けるに其ハつけるに
小構ある一所にて扉(ニヅリ)ありしが瘠(セ)たる肩なる色衣の
佛の御影などを入し笈をおやまちて傍へ落せしかば
あるとて衣とキしけるに付て細をとり出しより紐
付ける袋ありて内に金五拾両ありてさて其
所の里正(シヤウヤ)に尋ねて其ものにそをかへす

に落せしやいづれのかたへかれハそれに付ける福ぞ
おくられよとてとらせしかば辞するにも持てかへられ
てかへらんとしければつひに富家となりやうやうに成り彼
よそ之主も田畑など買得て農家となり安く
ても初(ハツ)の所以(ユエ)とするに見ずの鏡とせしかまた先立(キ)
たるんまつ柩(ヒツギ)を舁(カク)ざりし契りしがよそ之主ハちからな
きまでハ善事をなしけれバ死せばかへよそ之
主の子ハ柩を舁べきよしと寛政七八年の頃の
事にて彼驛の者ハ償ひてなかりしかバ語て
ぬ大かた宿驛といふものハ諸方の人をあつめて
なりけるの心う無なるに明らかに清民の旅(ツロ)ひ
て二人手までしかなしもかゝりしは事なるに無なき記

金乃ごとくかしこにあらはれ不思議とこれハまし賊に
ぞの為すくはせなりけれバさうらへし海にあらし
ハ隠し置て元のまゝひかたからじなどいふや
○ある人のいはく近きよきころ盗賊を捉ふ
ことは役人とするべき人のまなびの力なり。たつぬ
が下吏一人の賊を捕得ければ其家作をとらへて汝
ハ志気あるものなりかゝる業をやめよとさとし
もうたつよとはけるべし此たびハ許すべし重て捉(トラヘ)
へバ死刑に行はんふ止むべしやといひ含めて放(ハナ)されし
後ハしばらくもあらずして又捕(トラヘ)まへ来り吏にいふ其
言を用ひず又此様なる心はりみさびハ死すべからしに
せんかたなしとて刑すべき者の名と名の牒(カキツケ)に

書付ぬして家主に奉る九ツの名牒に点を付く
かさぬるを本としこれらの刑に行ふ例なるにはその
名に点附し者は脱(オチ)るなるべしとて一たび家主に渡し
わしかまゝりしなれども一ツ二ツありては浮べき
もありしも点なくれども吾(ワガ)過(トガ)にあらずとて彼名を消し
つゝおやし陰徳をおひまとはりやとすべしと云へる
べしかゝる業をとまりやるのにする者何の陰徳をとつ行
ひとんばれども家はさてありなば必ず子孫にまよ
病る者ありそれの相識(シル)者りはあるもので蕣(テウセン)参(ニンジン)を用ひ
救(スクハ)んとといひつけしをききに無びで今は存をとあへめてい
まきてこれハまも陰徳ならずあれどかゝるし揚(アサ)る
ことあるべしといひかくしかあらばなどかくまで再び

思惟しけるハこれハや年闌（ヘダテ）るまでも子にはなれてわびし
女國持ちし一人の男乃袖の重なるをとらへて截（キリ）ころしつ
これハ小石あまた袖より袂に入置しハ是をたのみて行けれバ
彼男もくはきてみぐるしき行者なりしがその外のれハ所謂（イハユル）ゆ
美人切といふ名のそれがあやしき事をくらべしハさらにある
をと袂よ入られたりしいかにもかねあるべし語られたりしいへば
その人是うけさらにつゞきを申さハ吾ハ今此所へ来て死
んとおもへり其故ハ亡父の住里の貢ぎしきりの年貢の
未進にせまりさらに我の身ハ黒正してもあれが見を
救（スクハ）んと一人の女を遊び女に売り拾六片の金を携（タヅサ）
へて帰る道路かたぐひの者に奪とられ此金をと
失ひたれハ妻子も面をあハすべき便なき者の難を

も救（スク）ふべきやうもなけれバ死なんと思ひ定めたるよしをかたれ
ば男も奪（ウバ）ひける金こそ十五片ありしかそれを是より
来べし足（タラ）ざる所ハ一片なれバ是ハいかにしても求め
らん其難をこれにてはらへのがれよといひふくめしかバ家に帰
げしいふかれしかれどもそれも同じく人の事なれバかへる
金なるべくわれで其文を得よ吾難を遁（ノガ）れんハ今ぞよ
うし沢唯この男ハ死ぬべしとさて行きあのつぐ
棄ひし人ハ誰ともあらねバ今更返すべき道も無し
ハ眼（メ）の前に金を失ひはたと見ればしつへくても
憂たるとなりじ唯納めをかへといふよりし氣色（ケシキ）の
弱まるをとらへてしきりに其儀へ押入て走る他行
つかしはやきとはしりやゆかんとあくそれしく急ち

人の命をたすけらるゝことくひに汝も亦命を拾ひたり
まことに久しくつかへ業をよくして君を今くせしことあさ
きゝければ喜びて執ちりしが又四五日ありて来りけ
一たび帰らんといひしを許したまへ帰りける事叶はんとて来り
まかりけるに其人はやく勝まはり次よりはいけものをとる
其事をきゝ行て業を害さんとすれどもたゝずおはしたる
とも也し従の請にまかしまさ我これに請はれても
うへんあつかれるべうよくも也し此われ我ための業なりて
二日三日ものゝ又捉へられ汝は必命助るべし
そわれ是をまへて其時帰面にもとづき初しきに返を
ば此世をすてあらめじめ帰勝より行ししとをいひてげるも
身をたつるに次がふかうんいてとゝまりしはしがふとのまる

新息より七八里のほどふありけるにゆくて人の田
まらぎを勝くるゆいと雇人歳くるまとよ荘屋がもとへゆくが
一筆をとはんとゆくもさちくにあつひとしやられなにもて来
ゆ道なりし一里斗にゆくて俄に大雨降来りける
ば此のまつけもなかれば其ある家よいつとりて晴間を待
にやうし暮るときなりぬれど空晴るゝぞとおりん
とすしにや老たる家あるじをとめて此先に河
ま有りて水満てわたるべからずとゞめければ
てもきくていふかれきことにいはゞ一夜をと明させ給へ
とのびしやどりぬあつべきにものさけあたへにも
てなさけてはなくしきさへありて来るめぐれとつきて
わざこうをもたのまのことどもをいひつけてとらふあるに

蛇丸はしばらくありて我が棲る一間へ入るをおやしとゞ
たまくらにこれぞおもしろきうたなる石の五輪の小さきを取り
まじふたゝびいそぎわかれでうたに思ひつき何ごとやらんはかりや
きて立出其夜はいわさらうつゝあすて過ゆめうつゝ手の内の
あらきなるうんとするにはたなほよべの作者れあやしく
んすまわれば我ゆくふそれやとゝ尋めしらべうちに
其ことふ住人に年月をあまりに隔てしがいつくのまや
みさぬすまく今をと窮ひて吾命を助けるのゝたなつ住人
乃をあはれぐらわ聞きとうて往りしを其人すなわち再びあつぐ
きよしわりしぬ住人たるればはじめの時に此縁に仍て命
をも失ひ侍んでなりしば此縁とて其人の名のりて明
昔にありつゞきふりいたりきの襟をとのるしとめる鬼

てはそれにその身のくすりにておのれがあのかわれは予編せし侍り
不思議に命助りて人並みなることの件りを語りしに
うけれどもあはれむじも此驚き且喜びて吾志乃通りしと
よ侍りしに悦びて黄しも十年の月日をかさねて此世に
今もわれらがおはきのつかりあ人かたしたる鷹仕合は
作しめど義ありて我家を継がせんとしたれども
うさなつき男なればわかりおくむ母のなつかしくて止まりぬるが
やがて我親子うちつれてこの里を出でくいや戸
に来りしとうや其の君子にして眼識ある賢が再び
作るの是より後を情ざる里に心が道理に晴らん忠
当代に希なる志にて其の相をあれはきざし寿遇る
あるべしや

○あるもののまづしくて母の親乃養ひがたきにつき
盗をして捉へられけるに母ありしとてさめる
「てうしき世わよう君への御めぐみにて親を思ふ心のまことよわが
子なれば奉行に聞えて死罪を免(ユル)され追放(オヒハナ)されけり
かやうの事よろこびのあまりとかくいふ人ありき
○粟田口にて刑せらるゝ者馬よりおりて溺(イバリ)して冬の
ゆまりの湯気(ユゲ)たちて面にかゝるを静に見るものを
人見てさしも麦ふくれかゝりし猶心をし優にし
なれば實の帰(キ)するところやしといふべきなりし
とありし人あり何者にて何の罪を犯せしや定
めて賊たるべきが其大膽沈勇におきては惜む
べき者たりしかども其才の用ひやうあしき由なる

犬馬の死よりも劣(オト)れりといふべし
○元禄の比ある年の事にや京の九中
村某たるもの奢侈(シヤシ)(オゴリ)に長じて官の御咎(トガメ)を蒙り
捉(トラ)へられて東へ下る時大津にてやどりける夜逃去
けるに鹿の如くときこえて「京のたづねいはどもおぞれけりの
鹿の如く急過(クワサ)奢者(シヤ)の罪をいなてし懲(コリ)ざるものなく何
なれどしまた其後浪華の巽(タツミ)にかくれ住けるの
聞えありて召捕まで遣さる事に道をとり
「若いかやうの事あらば花の縁をとさとして誠
に若いまの世まのあれ乃がれがたく己が非を省(カヘリ)
ざる志たんにやかりしなる人係せて許せしハ
まことに喜ばしの然異何かしハ事なくてのち

ことにをゝて家りをせしむの病人の按腹さする間
為陰子く妄に事(コト)を弾(ヒカ)しむ按腹はんと静めて
なんぞべなれどもいつりしぞとはもろこしにて蘇合楽
を吹聞に妨る薬とて蘇合圓といふ故事よりおもひ
よりてうつしせ庵遣者のこと上たりしはあるべし
○いましたてまつの俳いかにに辞世乃詩奇はなかりき
る人の目をようろこばせるはさまでもいふべからん
夫ゝされくるしたまのそこそつとめてもさておもあれう
しやいふへかりしは其をりふしにさきにあるる人の辰
に仁斎先生歿(ル)寺の古徳の辞世の頌をとてきかく
斜(ナメ)に文字乃象(チ)もたしかなるほうにおもとかく書ども
あれかしと笑はれしとふ意も用し意も禅家の例に

て知識といふぞほどの人は大かた辞世の頌あり
予かくまへる老和尚も安ご人所翔に頌を書
はまだしと記されしてよみはあれど勉強(ベンキヤウ)
したるものし但し此勉強は法語のうち成べきが
酒くなくの境界よりいかで発もよし聞きすさび
しくるし此ごろきくに木津の里乃禅院の住僧
に臨死のよみんことを乞はれしかばけしてさて其期
に法衣をと改め辞世乃頌をと云端座して入寂
を称ふ其寺へ後にも住せし僧衆のことふく
収帳乃内におりしにたしかに人のうけたまはりしけ
うきさ大坊主なり後住意をつまりさるも人うく
たくもいへば吾は先住之臨末乃形相に意滞て

迷ひありといひしのハいかなる事をさしていひて其後ハ
あんざりしとか也其里の尼僧たちしかれきよりたまひし
にかりてハまことにそのたゞさハたとへ申すべし畢竟てきて
ハ名聞よたらたまて事にそのなかにしいふとも事のま
まさにたる道べしやを近日済家律師の緇めとゞめし
ハ雪上に霜をかさぬると今も忠臣孝子も及ぬべからず
抱きたしく其中心よりおもふとのハ頑愚卑賤の人に
多く聞えてしかやうより名利の為一点もなし之ほぼ
し智者あらで頑愚にくわしき道をたふとき
ものなり
○あるものの其妻の辞世の代作を其師へたのみし
ことありしハいともめづらし辞世を法前をたのみしハ

さもすればあるものよりて元来の口号あはせてに
さなどのさうひをおもうれて人すれば和許さるべし
はゆるに又其あるてとおもひ出しハ何ぞの和哥
師所まる頭を辞世のうたを讃佛して誘道
とはえらしの業平朝臣の哥を出りしゞつこれ此世
のうり納めしとハれるハいかでも和哥師みてとるし
○浪華に浄家の一老僧紫光とかいふハ七旬
有余にてもの学道ゆゑは不僧徒の不律を
いましむ紫衣に進んとせるんよひらひて紫衣の位
奔ハえくるしきものなり護しゃれよなどいふさ
ぐひの事多けれど凡僧ども憎みていふもす
ればてんで虎とし誹謗せんとするあらん岐廓新

所の扇屋といへる樓に佛事をとりおこなふ老和尚
を請じ追福廻願を希(ねが)へばおりまでて勤む和尚は
訴へりぬるをとはなけれど請に應ずるは僧の常とし
昔性空上人の室の津の遊女をとふらひしためしも何
まで縁に随ふとして彼僧どもにいざなはれて
これより佛前にて誦経念佛などおこなひ回向を営せ
られしのちやがて高堂と稱する妓どもあまた出て僧を
なぐさめて其名をおのおの名のりはじめていと懇にしを
中に十七八才なる青柳(アヲヤギ)といへるが老僧つく
とうち守られ眼(メ)の色そぞろなる風情もせんかたなく
顔うち赤めくちうつむきしがやゝありてなにかはし
とられし次第をおもふて讃(ホメ)られしありそうなり

さはさんざめきて一座も興をもよほせしに此青柳は
才ある女の殊勝にもぞろにて十念をこふに老僧
うれしくおもひてさづけてある扇をとりわけ与へさせよ
とらせける妓又傍よりいふは上人の作あつきに見え
まゐらせんといへばうちゑみて出す扇に筆を添て
匡ふくる春なかつぼの風をうけて十かゆく柳のいとも深し
きゝし其扇をとり入て皆座の者も手をうちたゝかれしかば
妓ありていふざれにもさかなしといへば其のうへに移へ
らる此僧もおぼく書ましかば妓もえんとかてゝいつく
よろこび再びおもしろげにさらぬたるとあぐむとぶと
十念をさづけられしかばありける妓どもみな呉に同じ
に念佛をさづけられし母は吾娘の足りしとかれは其の志

ある時みなわりなげにはここにつらなりて信心の気色
形を見はじめしよりいやと生て帰去らばいかゞ我
も帰るべしやと老僧庵をたちはなれしより寵僧なる
従のみなすとあたくみしてはらひあへず然どもに
信されたる無十念をうけて無かづきしのたゞしか
かうして老僧も後は此ことを語りて青柳を
かくてはまだにこゝの生死といふとも忘れさんま
ごりしにかはりもあらもさゞめおそろしかりしんと彼
者才ありて十念をとむしにおどろき恥かしく
なりてやゝふかんに彼(フリ)せしかどもなほやまひのおこり
にんぴ爽(サハヤ)かならざりしかば氣色を見(ヒ)奇なりしまで
あらへし其間は佛よれは常の意はなかりし儚(サテ)かれが

氣絶をいそぎし拍子を以て十念を授(サツケ)し彼わし才
なるべからずやうやう大息して見えんろん志賀寺のよ人
のよろこびもみなひあへされし僧はそやうやうし俗氣ども
老ありやてんをゆるめて女かりとかは気しむまじ
きものにあら相識る慧嚴師四十五余なる持律な
なりかば大僧よそこまる其ごとなる者や年さ
けれひさ食事なよの不自由にふそさんまいはさ
まれぞれはらことふれどいまではわれも老しやせひ
てはじ女さ女は近よし側女も京んと思ぬやる
さく成りがいまだ法えせらより置かりしや側たる
過(アヤマチ)も出くるしことうべき戒律をたもつは隙きとは
よくかゝつるしと語せられしは甚よくわりしと言べき

○一 赤穂の難に不義にして逐電し大野某が女(ムスメ)東
備梶浦某に嫁し居たりしが此出奔のゝち何となく
住居の裏乃空地に隠居をしつらひ年久しく米穀乃
分限なりしも貧しかりけるにつまり数も老に及びて死去
並びなかりし其妻諫(イサメ)けれどもさらにやまずして
不聞(キカズ)なりし良雄をはじめ四十余士復讐(フクシウ)(カタキウチ)のことを遂(トゲ)
きりけると聞えしかバかゝりてぞ其人数の名を称して賞
ありし中に大野が名ハなかりければいよいよ一旦諫
めつるを用ひず此復讐をも備へしやうやうも疑ひ出て
つゐにおのれが名ものがれぬハ其女(ムスメ)もいとはづかしき
ことなりとて外々なるに家をもかまひ住しかべきさまで
ありしが下僕をももたで一人にてかくれしなれバ一人なり頓

をかけなどして出ありくを常に何となく席を改めて
見ると貧しきさまともみえずあつくはぢらしき容しいへん
めさればこそ父は国老の長たるものなりけり国難に臨みて
逐電ありしはひとへに復讐の人数にも入て死を不義甚し
きことゝいふべけれど其身には罪なけれども世にある人の
女(ムスメ)なる律なれバ士の道にある死恥べしこれに付ても
よりハ殊ときつべし女子ハあれど返すべき家なけれバ
かゝるところにやと出り裏の亭(テイ)に住
をみるべし二人の子あれど彼等が侍養せんハ其
道し吾は再び対面せじとて先より召使し婢を添て
めしつれ親しかりつるハ老婆一人なりといふはゝかりハせ
てさすが女とはいひつゞけども人ぬれて宴をも使ひつかへて

いへども今の義士の勇に死あるにはその次義
にあらで遠からぬさまも彼等が始(ネタ)ませては内もこゝろ
よろしからぬ一生鰥(ヤモメ)にて果られしも多し
後家となりたる妻を彼妻窺(ウカ)ひて言ひかへすもみへ
そしもせんと障りあれど同じくはやがて立ちかへり義士
後は情けしく避(サケ)ならるゝとぞ此節操(ミサホ)安なりに似つかはしき
きこへもあるべしと其隣国備後の人坂本才助といふもの
筆記にみへたり
○又ある人曰赤穂の城勢大野氏上席たりしがもと
から其年ばかりにはいかゞはしき氏其聚斂(シウレン・トリタテ)に泥ぐる
間事起りて城を除せられしに及びしかば氏大きに
赤び餘あまり接(ツキ)て旅さりしかば大石氏出て事務

謀りし迄来る時に借りられし金銀などこれなき
に返辨せられしかば大きに驚きて此城中のやうやく
ほろびたるも人もあらざりしやと面を背けりとぞ
されまで大石氏は一向用られず一とせのれ六七
度もらひなど申せしの罪とをありしてなんしかれ世にも
人をそへたらはあるべし用る人なされば千里の駿馬櫪(ウマヤ)に
伏していとも大石氏は雪霜の難にあひて松柏の
節を顕はせる成べし
○良雄京中の所の人皆飛ばしきとさる斗
みせし武智ある人も復讐のことを許して彼はあ
まりに人を誹謗せられて其いひけふる事を怒(オコ)せし
しとばかりいひしとぞ由て斗たゞ次は敵方に油断

や諂(ツレ)へるにあはざりし其謀の深かりしを感ぜし又
或人いはく山鹿甚五左衛門の辞をきゝてありし未
穂子熟(チツ)しては居らぬ良雄には付て儒学軍学
をも学びしといへり信もあるべし
○明智左馬之助坂本の城を籠れる時責手の内
に入江長兵衛といふ者あり一番に乗んとしけるが
濠裏より塀下に付(キ)居(リ)しが睥睨(アチボノ)に及び左馬之助
寄(ヨセテ)手の様子を見んとおもひて櫓(ヤクラ)にのぼりてこの長
兵衛をとらへけるにより見れども旧友なりければ声をかけ
てこゝにあるは入江殿かといへば然りとこたへければ
定めし一番乗なるべし手柄をとらさんと思ひて鑓
奇特の志しなれども能思惟せよ此所へ乗られし武

を選(エラ)しうけることなくして虜々の功名は天下のさた
なれども是ほど身のなる果は今日の恥をさらし天下
も同じ事なるべし同じくは武名を止(ヤ)めて一生を安く頂
て子孫を相続せらるべしおのれらくはへたる用金
あり得んならば其の所だし宜しく入江も道理に伏し
て旧交の親切を謝し其諌に従んといひければやがて
皮袋に入たる黄金を櫓(ヤクラ)より掏出して与(アタ)へ今日
此城落身(チ)死べければ吾にありては狩存も同じ人の
人心無用なるべしと甚だ喜びて是を受け京師
に居住し右の金をもつて貨殖(アキナヒ)し其家孫今も上
京にあるといふ左馬之助は落城の日天下の重宝を
焼き失なば人の宝なりとてそのために惜むべしと

いつりしハ彼松永弾正が乙御前(オトゴセ)といふ名物の
茶釜を打砕りて捨しまハ天ばれしき志の人にて
其物の由にて此入れが一件を武軍記に評して云し
ところハ何ると云れども武士の本意にハあらずと評
せりこれもいはれたれども平ハおぼつかなく士の士たるハ義
をもて周旋(シウセン)すべきを其代の風俗そのいハ味方ふじ
てくるハ敵となる唯功利をのミ眼(メ)にかけて生も生
を盗ミ死もまた死を得ぞ畜生の相損害するに
ひとしこれをもてみれバ左馬之助が諫めも入れ
ず従へるも儒者非とすべからず浪花の恩にむくいて
陶朱公に倣(ナラ)へるハ知なり
○百井塘雨が死に江戸に蘭亭といへる才あり
詩を能くする盲人ありたまたま江戸にて酒慾を好み放蕩(ホウタウ)
せる中にいふし得るものもなく鎌倉教恩寺に付
物として重衡卿の千寿の前の琵琶の遊象あつらへしを
得て秘蔵せり大さ常の平四半ばかり肉か厚く
漆にて塗り中に梅華の蒔絵あり、これも不能(アカス)
髑髏酒盃とせし付て尋常の物は面白からん
とて鎌倉に至り大館二郎の塚を発(アバ)き其髑
髏をとらんとするに忽雷雨(ナ)起りくれど怪(アヤ)しとも
懼(オソ)れず沢山に帰りしが頃(ヤガ)て酒盃としたりけるに其の
翌年正月廿日に又び何の故もなく死せり勇士於保
平人の墓すら発(アバ)くがとる沢まつくらにべいうの勇士乃
墳(フン)をも発く盲人ハ詩章の巧(ミ)なるに慢(マン)じてめくる罪

これを知りてつゝしむべしとぞ

閑田問に曰く蘭亭がごときは知る人多し越云此書
人又乃他国にあるが許へゆきと贈る代筆なりしその
指揮のまゝに門人の書きたるも知れずあらしくて心いるま
もよありけるよりて用事辨ぜざりしといふ事きこゆる
に其返事に愚眼にてはあらじ偽なりといひやりしとぞ
其人がらおぼしく其れは徂徠門の者ども文筆に住む
て放蕩を達としいへる類多し其中にも此書人が
ごときはよろしからふ之類といふべし凡小人の才能あるは禍の
基なるべし

墳雨又問に云織田信長公越前の浅井父子朝倉
義景等を討亡し其生首を盃として以て此三人

つかれに大小黄箔をぬらせしそれとつまりし収めの盃
なりとぞ柴田勝家をはじめ一座みな是にて酒を
賜ふ明智光秀は下戸なりしかば辞して呑ざりしを
強て一盃と呑しめられけるに酩酊して迷惑せしとぞ
又むかし戦国の趙襄子智伯が首を飲器となせし
ことあり又元の呉元甫が髑髏盃に酒を飲で清風を催ふし
など和漢同じ類ありしや又浪華の士永田某は諸
藝に通じ酒は大上戸なりしが秘蔵の巨盃あり
髑髏を金箔にて張りたるにて八合入しとなり酒
長ずれば必ずみだるゝをもて強て呑せけるはいかなる上戸も
困りしとなん以て閑田云人をして浄不浄のわかちぬ
ようはあらじ又これより惻隠の心なき事はあるまじきと

かゝる穢しき事側むべきことゝして快とせざる由
さは其身の奢侈にくらべて人を失ひけると唐も
やまとも戦国の世は人畜の差別つゞくなりぬれば
に今の世にしてかゝる所為を喜ぶは何ぞとかや
○同塘雨云摂津国高槻の先主領内に狩せられ
ましける山中高樹のうへに嬰児の泣声怪しく
きこえしかば見るに鷲の巣してこは其鷲の掴み来
りしなるべしとて士に命じて鉄炮を放しめ
られけるに鷲は巣をはなれ立て人を樹に登せて
捜し求けるに巣中に赤子と鷲の子もありければ
赤子を取おろしてありしを見れば男子なりし
かば甚喜びたまひはゝとよべる乳を付て養育

せられしにや長ずるに従ひ才智発明なりし
まゝ取立てよりは後前氏を鷲津見と号
られ禄百五十石をあたへられしが子孫今にありとぞ先
年京師にて鷲見七郎左衛門といひし人は其子孫
なるや和泉堺に旭蓮社といふ浄土宗の寺の開祖玄
誓上人も鷲にとられしとかやしかしてたぐひあるにや
みえしと宗因云東大寺良弁上人も同じき伝記あり
○鷲の同しく同国にていへることあり四五年前
に越しか加賀のあたりにひとりの浪士大鳥に
掴まれて空中をかけること二町斗を経てかたづき
しもちゝぬ山中なりしに大鳥此人を掴みさらむとせり
て体をふりはなさむとして腰刀を抜てはらひし

さるものを切つゐに作し殺し彼鋏(ツハサ)を切てこれが
作しよそに吾身源をけふ能ありて辛(カラ)しとや
ふとおりて人々あひしに其實をとらんとして大に畏
まりけば其子細をうかゞひけるにはいつこぞとて
へば箱根の湯本ちかくありといふ遠かるほどと
後二町斗ふ来しふゐる乃響ひのけがましきを作り
におどろきぬらばしき出し其邊に這(シ)寄し旅(ツカ)れと
体のまゝ彼得方に出されば其翼(ツハサ)に付まゝ其頭(ユヱ)を
聞侍く其勇壮をよろこびかるゞの諸處より逢
しふいづれもへ付へと出勇せるとりや大かるの人
なるべ空之中より西氣あまりぬべきを携(タヘ)へめぐ
までぬるゆゑ作るハ島のしたかう次人も皆よめづらし

此島ハ大響あるべしこれともに箱根の邊うまく折く
人の捕(トラ)へれしことあるへしハこれが訴西まてあらじが
此後ハ此禍(ヒ)止ざりしと其わきりみてハ甚びしとさふん
○嫌ゐ云元文二年の比四条坊門油小路の東に
観場(ミセモノ)の儀(シ)を業とする者有し奥丹波の何とかいふ
山里に農人の妻又十四斗なりし應聲虫の病
ありけしとおはしまして観場にだされんやとかゝりしに
ひとまに二三日這留しまゝしのいかなる腹中より人聲ゆ
ひとて病人の聲よ應じく手組のまゝぐいつてもなく
に聞ぬ其文の方の種よ先年霜月に引つかわして六條
指(テ)せしふ薬所あまゝ体しいへる腹中にて物といひし
ぐは諸人怪さまもりくこのまゝの事ばかりにて恥かしく

おどろいて其夜ひそかに帰りしといへりとぞ　宗因云
金蘭斎（コンノランサイ）といふ老荘者（此傳ハ予ろ時人傳ふ出せり）腹中より声あり
寝しく餅くふて　おぼえずわれもそれなれば芋べりて
おぼゆるのみにて伴人きらひ藝の間にて止まりけ
後にかりしと馬枚亨安といふ老人の話也し自のまさに
は一氣に語りてもあるまじきんうし
◯同云江戸の浄瓜（ウリ）畠に狐（キツネ）あり瓜（ウリ）をとりて喰ひ
ければ吏大きに迷惑し吉川惟足に祈らせける
されどもこの事は惟足之家にの事にも及ばずとて
何やらん書付て与へられしを其畠に建置しかば
そ夜より狐ら来らず此事は「おのづから名乃化りを喰ふ
狐うかつといふ夜句ありしとぞ文京三條殿の

伊勢屋といふ元結を売る者乃家の造作せし
より福者となりしかば卜者をたのみて盛（セイ）衰
をとはしめて逆木柱の祟（タタリ）といふ事なれども其柱
を取かへがたかりしかば祈祷せんやといひあへる
時ある人吉祝つげしとて「伊勢屋」は元来一の当るれ
ばさらに木はたちかへるまじきといひしに不思議
にしかれどもまゝありしとぞ高貴の元結売り
桝まで元を売らせしは面白し頗る世間にいふ逆
木柱といふは元来亜祝のいふ事にて故にさかさに造
るなどとも本木を逆さにはつることもあるにや古家の
建物にも本末のゆがみたる木あれば世に安倍晴明
の判といふ五行☆かく木に書て用るはこれ本末

名残なきうしの咒術なりとたゞよ三画の筑とかや

○岡田某に付て又云出ける事 其年逆木(サカキハシラ)柱を
用ける家は必ず鳴動(メイジウ)すといへりされども十餘
年前或人白山通三条辺にて借座舗しけるに
毎夜鳴動して逆木柱の家なりと後に聞けるに
それより後其主もしれず此国の士我が通りしに
ある時同其若党夜中に主人を害し金子を奪
ひて逃けるが速に尋出され磔罪に處せられて事終
済しが其主人の怨念散ぜざる故なるべしといへりさ
逆木柱に付てまさにさもありけるにや

○ある京の人寺町を歩行ける時一老人猶を
持ち杖をはさみて先へ行けり猶供する人に寛(ユタカ)

みて威ありき人々とをそれば随侍の者なしされ
ども平常の人とはかはりあまりおそれぬもまじきとて
追付て面を見んとせしが下寺霊の社へ入て出
ざりしかば怪しく成て傍(カタハラ)より窺(ウカヾ)ひ面を
翠(ラチ)しまらんての能者まへてそれ名人のさまへてありし
端沈權者ありしと憤る気記に觀世大
夫が切幕をきりて出しかを見しに其氣滿(チ)て
一身の周(カタノ)もしも透間なく窓(タヤスク)易立むかひが
たく見えし声をうけて震(オソ)して柳生但馬守殿作
られしとかまひも同日の談也此後は術を守り
勝ることなかれど名誉の人にきそてはかりがた
事もあるはためし也なりとおもふと教ゆる人

蹴鞠を弄ぶ人も我氣を納め体を固(カタム)めて
とゝや書をよくするも亦然るべき氣より体
体より腕(ウデ)におよぶべし嘉しみえるたれど理なれ
まく押さえ
○六祖上人曰座禅看経などしてと静めんとする
時はくりかへし多くの妄想思慮うかみ来るものゝこれを
即一心乃散乱(サンラン)躁動(リドウ)の心とぞいふなりとてさて
事なきにおもひ日の明らかなるに塵埃(ホコリ)のうつる
うつれるにさもよへし はゆへも塵埃ハさりともえん
え無なりけりの光をまちてあるにてこれあれバ
○浅海八幡に佃(ツクダ)房といへる俳諧師鹿角をとまれり
し形 の如し無作本まゝて造り座ハ皮をかけて張り

手練にて握りかゝるは左右の中指ゆへて如此
をもつゝやうにすれば自ゆふ骨をもちし是ハ信楽(シカラキ)の
俳諧師某ゆへと多かりとへしといふ此某固此角
を時々もちけるに書鹿のまろをつけバさすかに
出来ぬ来らざる時ハ鹿角をかけても若しおもへバ
来らざる時ハ鹿乃角をかけてハ然ると露まへ
よくぞあらべし其然るよりて氣しくて時ハされ
ども侍りつことをもつて石(モ)吾(ス)ら飛ぶの声を
まゆひて其てもめと此もハせて鳥(トリ)鳴くさぐるふし
○或云今世松茸(タケ)を守(モル)とて蛇(イエ)を守
猪鹿を此じうち粉しすへまもり田乃端を
あるべハ追てでハめれて涙られバ猪鹿田をかり

すは追はれ山へ入ては追はれ行方もなく食もな
し松茸などは餘る事に應しぬる食たるを今世
氏の利を貪るあまり甚しく願ふともまさに猟師(カリウド)乃
如きも渾ての利を射る故なり不唯かずの事ぞ
も眼を光らして探(サクリ)すくむる鷲(ワサイ)鳥獣に及ぶといい
つくしハ耳に留りぬ

○此筆記を草するの山深乃者とものつゐてうり
かく貧寺のかたに住る猟師鉄砲甚だしく
みな飛鳥とも多くうち落せしが後その近村の山(ヤマ)
家(ガ)といふへ移(ウツ)りて住ミ一切殺生をやめて山へ入
しぶ故もはなく沢宮が執美飛の女子あつまり所がら
あやしくれども従ひゆきしに小倉明神とまうす沢社

なめぐなみなれも共にめぐりしに彼女鬼(キ)となんなせ
睨(ニラミ)ふるをとうくれど眼みえなかりなれば恐ろしく走(ハシ)りて
帰りて此後殺生を止(トド)め農業をはげむものなれども没来
の罪によりてや程なく勝不記(タハズ)子ハ二人あ
りしも一人ハ早世し一人ハ洞瀬(ヒロコ)にて身はずれたる者
となりぬ常に見聞する所ハ片離(カタハ)の多し
あつひハ殺生とうくせずるものゝ多くしたがふべき道理なり

○謝肇淛が名利は文史の学好み鬼神ハ婦女子
乃する丈ま了して信ず鬼神ハ丈まの気をとうし
なつといふり凡理学家ハいつまでも及ばず沢おしらしからを
よ筆にしもなつ沢人ハ神佛乃如を顕(アラハ)して婦女子
の口実とうちょしめづらしうし沢殺らたにきしれた

予が覗ることろ二十余年前讃岐金毘羅より
まうでし時は此乃神馬のかに駒一疋馬屋乃
あれば此あぎたりいうにて見りしに折つく詣でし
くかさうく此近き東の村に馬乃難産
みぐ苦しめることもありし此御社へ祈請し平
ちうに産しめたるぞこの駒ハ奉りしかど替ひ
がやうしやすくなれハいよいよ弱りけれバ惜む意
そ見て行縁せし旨此駒こゞつくまでとてけんざる
こうに奉りしそれ兎づくさしおそろしかれバかきれさらとや
いへりそれ此もとくをそ書抄此所此御社まうさ
他にもいふらつされざるべてはのこと少しも皆こぞれ
をと思(ハフ)ふべく

○みぎの橋経亮の筆記にもいはく熊沢先醒
はじめハ藤樹先醒にまなびられしか熊沢氏
皆人乃よく知る所なる神道ハもしくの御子神でかくを
やにそかしとと藤樹ぞしたに
「ちゝかふう祢の中にろう門にかれ中まうてこゝろみにうかうり
うつろへ後までもがも藤樹先醒ぞかりいらしむべし先
ハ藤樹乃末孫中江久良といふ人の家ありしとぞ
○又此所あるハ寛政のはじめ清水外(ソト)山坊
勝のより南の清閑寺にいるや下照の地よおり
妻帯の隠僧にて酒楼とかしが此辺太不襄までのうち
東乃坊を修理せんとてあつの道れたを堀窟(チ)し
に石棺のごときものを堀出しそりたつふそ堀し
ものとさとめ坊乃人てこれを瘞りし者と

そのうちに暴病を得て倶に死せり其首を
られども源平盛衰記に所謂怪獣一竹を埋めし
塚此辺なるべきを後世其古跡をうしなひしが是
其跡なりとて此其祟あるべしといふ人ありやがて
そのまゝ土を覆ひ猶そのうへに塚をきづきて
祭けるに其の祠を載せ卍乃南方に小池をありて
今もそのまゝし一竹なりしが六百余年を経たる迄は
めし邪崇をなさしと懼るゝなしゝれすさまじ
まれしくあやしくなりけり
私按南殿に鵺乃来たりし一首をよみて詠ずる
を平清盛左衛門佐なりし時作に伝へらひて云
て進ぜられり叡覧ありて叢なる毛朱く 嵐乃唐名とも

南臺の井をとて中に蘇の清水ちの最も捏れ
まり佛恒の行い勅使を下し宣命を命し修せ毛朱
一井塚といふは則是なりと 所要 見説記
頼政乃射られる鵺のことし次其に此清水の
岡にありなし次なる氏は三年坂の下路に嵐堂在
変わらぬ又郭書堂の西門より高き是その所なる
所ありて土人の説なりと山城名勝志にゆうく同く
名跡志にも清水乃門より西に出て六波羅にある
南側人家の西に東西一町余続きたる清水の岡
なりやいつかたよりも一井塚は同じく盛衰記とい
そうに明なりとるも同し此外六坊といそうる
なたにうくれ果つ一井塚を見ん来なられ

何ともあれ此異ハ正に人のしわざとハみえずしとなく
ありけり

○北野随念寺といふに寓居せる空心といふ
尼師疾病(ヤマヒ)ありける時生姜をすゝめけるに答ふ
尼生姜の皮をもはらひてあたへければ莞爾(ニコ)と
して樒の下にすて独言して嘗(カマ)れけるが是ハ
古徳の言戒を守り他の病を施する人ハ菩薩
に倍寿をうるよしにて殺生よりついに青侍をよくし
病人ハ樒の下に臥るも骨骸(コツカイ)の病る故に方々とて
意りし憾(カナ)さなきてとも忿恨(フンコン)(イカリウラミ)を発さざるほど
とあるを此尼師ハすゝめられてまさしく是ぞありけり
よくよく志なしを平此ばかり病しに平生偏急(ヘンキウ)

の僻(クセ)あるがうへに行きてをすべし逆の憂あらん
ことを懼て男資規此跡といひ出て諷諫
せられしはさすがたりしもひかりありけるも肴こ
るべくしてありけり

○平怪談をなすもの説りあるなどにもあればにや
奇話風聞さて又二階を掌く上野人偶良能其説
に去(ル)辛酉上野吾妻(アガツマ)郡猿(サル)が楊(キャウ)猿ハ以テ訓ヲ橋ハ以テ音ヲ呼フ宿ヲ越後街道といふ
無馬(ヒャウマ)といふもの一母某月園燵にありしかる小幡に
くべる藁(ワラ)の火うつりて身にかゝり苦悩甚し
くてはひかねれば立騒(サワ)ぎつゝうちけちつれば忽ち
消しが衣類事故なく身も火傷せず唯指さして出
たるほどの疵ありしかど日を経て癒のごとし

極月廿八日に厠よりふたゝび厠にて火おこり身ハ悉く
くこし厠ハ焼失たりけり○正月廿二日まで某の寺にこもりし
あり彼怪異のことハ尼にたのみて寺に入しける
に廿二日衣類をとりいだしこの事ありしかバ宅へ帰り
しが例の火おこりて其家并に近隣連焼廿七軒
に及べり自(ミヅカラ)は手を放なく出入て一日もはやく出ける
其後善光寺へ詣んとて出されけりとぞいとあや
しきにはこばれ帰りし此娘氏またも妻にかはり
聟どりせし其聟ハ篤實の者なりしかども女をきらひ
てこれと出決寝に通(ヒツカ)ざる聟なりし故しばらく其
出されける聟もあとよりて悉悪事しく寺家は出し
かずもいまだ女の縁切ざるを幸に或夜彼寝室に文其
家よりつかはしやりきたりて御所へゆきたりし人なる小園焼に
よりかへるものあ(あり)くわざわざにみえしとせしとみな切なるが
そのふれありしてで女の文なりしかばこれハ聟を殺せるならん
罪せられし其聟ハきはまりなきもの女はわがもつれに
寝まはしを追へたし今の土民はこれを出来しると此娘
念ちかし此女悟にありし家もうしなはるる成べしと云
つたへしぞ　此娘さがゆゑなりしたゝりの人なくなふて聟を殺せり其念此ところ
にありて娘氏が家の禍焼となりたる所甚し此へしや
○門人某東語せる奇事鳥丸四條街に近江屋某
といふ織人ありて妹女同街後小路同織屋某へ嫁し
さりしがやがる女それ姑の心ハ愜(カナ)ひたれども屋某
美色の者ありし人ありて走りて離とはなれてこれと離縁
させ女ゆゑ愁歎きしかども出されし親の家にかへし

ひとつとしてありけるも若菜は心の内にて彼おもひ人を
むかへ迄しよりけるにあつく若菜が妹縁人のもとへ
かりそめに来りて携(タヅサ)へたる日傘をさし頭にたてかけお
きぬ乃隠居へおくりけるを若はその人にしらせまゐらす
んとひとへに其家にあやしき衣服なども取よせ洗濯へ
けるはいかにやまして人のさるかさを持ておくりて
きたりふとひけしかども唯外のかくりごとをおもはれけると言
ふりたふかへしより候いかなるにてまゝ人をとりて来りし
とはかなてらのあとよりもとかくさせやうもなかりけるもあや
しくとかこ人をやりてもとめてかふ人これを日
池重ならずてしる官へ訟(ウタ)へてあまねく布(フレ)令流しおほしけるが
其死骸ありもてきれども見るにまことに若菜の後

妻おやしき病を得けり腹のうちにおかしきものあり応声(オウセイ)
虫(チウ)れにて出でも是は声れを真似てかしかまり
いろいろの事を胸にすがりて若しきのがに他人にもの申ようは
聞(タ)へむもたりけるて腹の裏乃若へ奉此彼よりへ左なる女の三
年の佛事とせしに若菜なりけるを若菜がかさへ高乃
菊といふ来り後妻が病三年にまで及ぶくわしくかたる此若菜
もまさに意に叶はず洗ふれば離れし妻の家へもかへりもうたた
まらで来りしに三年の法事乃にやきもあやし若菜の来
りて彼おきものありしくそれにこころよくつくりて三七日いでせ
氣なく一ある後といひしがいかなる後妻は
病の悩みありしとも醫薬祈祷をはやくぜしかども
驗(ルシ)なくてかふて何事でも神道をいやし人あり

寄特なりときゝてもて彼病人をのりてへ通りしめ一七箇日
祈祷をたのみ武話せる人も此神道者よ志らしられば祈り
なされに香爐を掛へ出て何やらん香を焼き爐をたく
ましなるにて病人伏ま傍をさ其煙よくまと覆へば起
てもせのびしたてにぞしつてらく責らるゝハ苦しさねど
此体ハまちうじとのよ々るて却て験ゑらねバ神道者も辞し
まかり帰りぬのちかゞあらく死せるゞつ死体全く蒸れたなつて
腐ちるもよぞてたゞ医薬も実の的乳になりてせんなき
なく櫃をとゞめえてゝ入霊家も大に衰へあさなゞりも医薬
はかくふるもせ侭あるさ何しよきといひんかきなりけるなん
○鳥獣を殺すもの多しきハ志ありて人の意をさ悩ましむ
めあるハ其業を婿げ棄てやうの衛をなれて

とのかりきをと志てぬくもありせる念佛者もて欲深
したどいふ人もあり学者なるも私の逞しきくもあり
道をとまらく私しくをとおびむくハ天刑をいらん
○江南の橘は江北へうつさば枳となるハ土地を
うつれバむさるべよふしてえうりうめるも他の
氣の承るにありて氣味をも変ざることあり此
近江伊吹山の蘿蔔を得まり象囲に根の束
種さ尾張ごとくなれバ氣大根と俗称も此物
倍養厚原乃力を借ぞ自然生ありて辛辣
類なく润味をとめむ人は大に貴翫次志りたに
船をわまき他方にまかれバ氣味大ふ減ぞて淡う
みへ本のままなりといふべれ水氣に觸る故なる

ぶとし人は氣血順流せるかゆへに病のおこることなく
弱きものは氣に感(カン)して病むは形勢なれど仮病の
風寒暑湿よりも意をも用ひざるによりて又深く
まづ善悪の境(サカヒ)をいふも同し甚しきは金
銀をもとめて忽ち盗心をもおこるべし美色
をもとめて好む慾念を発すれば溺るべし欲(ボリ)
すぐるをとめざれば意を迷はしむるなど親
聴は遊(サク)べき道なし唯心の開きをもて守るべし

閑田次筆巻之四終

閑田翁之學於和於漢並傑出於世者也
而其志不在於彼而在于此矣故嘗欲建復古
之旗幟於國風和歌之域焉而欲以明于今
而傳于後也然其志非徒以文藻也実有存
世教之意其所著若干編業既大行于世如
畸人傳閑田耕筆等是皆緒餘者也亦豈一時之
隨筆雜々混説而其間隠然有益人之意

而詣于言外亦翁之本色也矣抑世歎
不徒以文藻之餘意耶今茲閑因次第筆彙
翁之令嗣直樹子請余跋焉余昔官暇時
遊于禅刹之中因與一翁相識翁亦僑寓空宗
打破漆桶窠為無孫之一莫逆余亦且於
國文屬僧東望之雄光季名不敢也翁筆
今年於古稀已過三年余之過年幾春

為尚齒會也以翁為第三味之賓余於翁有
如是之契豈可默而已哉於是乎書數言
以叢一跋

文化二年乙丑冬十一月

金子義篤書
于風竹軒

閑田大人著述書目

國文世々跡 三冊
譯文童喩 二冊
勝地吐懐篇鼇頭 契沖先徳著 大人注 二冊
近世畸人傳 五冊
同 續篇 三熊海棠先師編 大人刪補 五冊
閑田耕筆 四冊
同 次筆 四冊
大和物語抄補遺 未刻
閑田文艸 大人文集 附門人文章一人一篇 五冊
增補題字要解 大人閲 嗣直樹主著 小本一冊
門田早苗 一冊
庭訓抄 一冊
歌辭要解 大人閲 嗣直樹主著 小本一冊
鷄類葉代匠記句解 大人閲 嗣直樹主著 近刻
同 續篇 同云集之部 近刻

文化三年丙寅仲秋發行

平安書肆

林　伊兵衛
木村吉右衛門
堺屋嘉七
菱屋孫兵衛
錢屋惣四郎
文臺屋太兵衛
西村吉兵衛
梅村伊兵衛
野田次兵衛

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan